昭和46年9月12日発行通巻27号(毎日曜日発行) 昭和46年2月5日国鉄首都特別扱承認雑誌第516号

朝日=ラルース

9/12

220円

27

週刊 世界動物百科



朝日新聞社

読者のみなさまへ

こんな動物が登場します　動物を機械的に五十音順に並べたものではありません。系統だった分類に従って，われわれの親しみやすいサル類から始め，次の順序と冊数でお届けしています。概説(2)，哺乳類(62)，鳥類(64)，爬虫・両生類(16)，魚類(16)，軟体動物・昆虫類・甲殻類・腔腸動物などの無脊椎動物(32)。《1～64号の内容は表3参照》

総目次と総索引がつきます　見て，読んで，楽しむ〝百科〟としてだけではなく，引いて調べる〝事典〟としての機能を完全にするため，16冊ごとにその総目次をつけ，また最終192号には詳細な総索引をつけます。この両者によって，動物界の構成がひと目で理解でき，調べたい動物がすぐ引きだせます。

『私たちの仲間』のページ　カラーページをより理解しやすいものにするため，日本の第一線動物学者の執筆による解説や注があります。また〝動物週刊誌〟として，動物界のニュースや話題，楽しい読物，実用記事などを掲載しています。

ファイルで保存してください　全192冊を，発行順に16冊ずつ，美しいファイル（販売中・定価600円）に，とじこんでください。堅牢で豪華な，全12巻の〝動物百科事典〟がそろいます。途中から購読されたかたは，ぜひ第1号からおそろえください。バックナンバーのお求めは，このページ右欄『本誌の購読について』をごらんください。

目　次

世界動物百科　第27号

カラーページ

食肉目 裂脚亜目

アライグマ科	7
オオパンダ属	8
オオパンダ	8
ショウパンダ属	13
ショウパンダ	13
キンカジュー属	19
キンカジュー	19
ハナグマ属	20
アライグマ属	22
アライグマ	22

表紙　オオパンダ　撮影　田中光常
表3　**ギャラリー**　熊　高階秀爾

監修　犬飼哲夫（北海道大学名誉教授）
翻訳　白田　紘（武蔵野美術大学講師）

私たちの仲間

雪男の正体を探る《特集》　編集部　3

カラーページ解説　エゾヒグマの生態　犬飼哲夫　27
カラーページ注　小原秀雄

傷だらけの栄光　ヒグマと2人のイノシシ　25　畑　正憲　28

読者のアルバム　2　ふたごザルの誕生　30
ペット相談室・裏表紙説明

凡　例
□本文中〔　〕を使ったものは，日本版のために付加した説明である。
□くわしい注釈が必要なものには，その語のあとに〔注1〕と番号を入れ，『私たちの仲間』第27ページに，同番号で記載した。
□動物の種名は，原則として和名（一般に通用している外来語を含む），学名（イタリック）の順で表記した。
和名の多いものについては，併記したものもあるが，専門家と相談のうえ編集部で決定した。
和名のないものは，英名または仏名をカナ書きで入れ，原語（ローマン）を付記した。
□人名，地名は，本人または，現地読みを原則としたが，慣用の固定しているものはそれに従った。

本誌の購読について
本誌は，全国の書店，朝日新聞販売店で取り扱っております。
毎週定期的に，配達をご希望されるかたは，お近くの，取扱店にお申込み下さい。
なお，本社直接購入のご希望は，下記あてお申込みを願います。送料は，1部につき30円です。
朝日新聞東京本社出版業務部
東京都千代田区有楽町2－3　〒100　TEL 03－212－0131
朝日新聞大阪本社出版業務部
大阪市北区中之島3－3　〒530　TEL 06－231－0131
朝日新聞西部本社販売部出版業務課
北九州市小倉区砂津1－12－1　〒802　TEL 093－53－1131
朝日新聞名古屋本社販売部出版業務係
名古屋市中区栄1－3－3　〒460　TEL052－231－8131

次号予告

9月8日発売



世界動物百科
28号　9／19

カラーページ

食肉目 裂脚亜目
□クマ科　ナマケグマ属　ナマケグマ
マレーグマ属　マレーグマ
メガネグマ属　メガネグマ
ホッキョクグマ属　ホッキョクグマ

長く暑かった夏も終わり，やっと涼風が吹きはじめました。夏になると必ず新聞に登場し〝暑さにぐったり，動物園のホッキョクグマ〟なんて，はしたない姿を見せる私たちですが，これでも生まれ故郷の北極では《氷原の王者》と呼ばれているのです。氷原を闊歩する私たちの勇姿を，とくとごらんください。

私たちの仲間

大雪山にヒグマを求めて　北大ヒグマ研究会の報告　1　前田喜四雄
サルの威信を測定する　田所作太郎
水中生活を助ける粘液　もうひとつの世界　22　G.5プラス1
漢字のふるさと　22　藤堂明保
ニホンツキノワグマについて　カラーページ解説　渡辺弘之
チーズとキャラメル　ヒグマと2人のイノシシ　26　畑　正憲
ジャワから来たオランウータン　動物渡来記　1　上野益三
ヤモリの脱皮　読者のアルバム　3

私たちの仲間

27号……9月12日

雪男の正体を探る



ブータンの切手（谷口さん所有）以下同

日本では雪男が10年周期で話題になるといいます。ことしはその年に当たるせいか，雪男を見た，足跡を発見したという報告があいついでいます。また，その正体をめぐって，オランウータン説から，ヒマラヤグマ説，ユキヒョウ説，オオパンダ説，原始人類説まで，いろいろと取りざたされています。雪男ははたして実在するのでしょうか。実在するとしたら，それは未知の動物なのでしょうか，既知の動物なのでしょうか。内外のデータを集めて，その正体を探ってみました。

谷口さんが100ルピー（3600円）払って，カトマンズの画家に描いてもらった雪男



雪男のほうでも，「すっごーくアセっちゃった」に違いない。なにしろ,雪におおわれたヒマラヤ山中海抜5200メートルのやせ尾根で，日本の山男とヒマラヤの雪男が,ばったり顔を合わしたのである。

わずか15メートルの至近距離。ふたりは30秒ほど，にらめっこをした。

「澄んだまるい目をして，あれ，めっかっちゃったというような感じでした」

出会いのようすを語るのは，水戸市に住む服部満彦さん。39歳，登山歴20年のベテランである。服部さんはこの春，GHMJ（グループ・オート・モンターニュ・ジャポン）隊の隊長として，日本人隊員８人，現地シェルパ５人でパーティーを組み，未踏峰のダウラギリ第４峰（7661メートル）にアタックした。

やせ尾根に立つ灰色の影

服部さんが雪男と対面したのは，５月７日のことである。午前10時に３人の仲間と第１キャンプを出発し，午後１時に5200メートル地点にある第２キャンプへついた。他の仲間は荷上げがすむと，また第１キャンプへ引き返し，服部さんはただひとりでその地点に残された。

テントでひと休みしてから，雪をとかしてお茶を飲んだ。小用をたすために，外へ出たのは２時ごろである。天候は一変し，吹雪が始まっていた。気温は零下２℃くらい，霧で視界は20メートルしかきかない。

「小便をしてから，何気なく第１キャンプのほうを見おろしたんです。すると，やせ尾根の左斜面を登ってくる人が見えた。ぼくは，シェルパのテンジンがもどってきたのだろうと考えた」

と，服部さんはいう。

そこで「テンジン，テンジン」と４，５回呼んだ。しかし，向い風が強いせいか，その〝人影〟はまるで気がつかないようすで，雪の斜面を登りきった。尾根には1.5メートルの旗竿が，標識として立ててある。

「かれはその赤い旗のそばに，２本足ですっくと立ち，ひょいとこっちを見たんです。その瞬間，こりゃあ人間じゃない。なあんだ，動物じゃないか」

と，服部さんは思ったそうだ。

背は旗竿より低いから，1.4メートルくらい。顔には毛がなく，くぼんだまん丸い目をもっていた。鼻が大きくひろがり，口はよくわからなかったという。

「とくに印象に残ったのは，肩まである長い毛が，顔の両側でぼくのほうに向かって，強風にあおられていたことです。手がどうだったかは覚えがない。からだは岩のような目だたない色だった。しかし人間ではなく，クマやラングールザルでもなかった。30秒ほど見合ってから，雪男かもしれないと気づいたんです」

服部さんは，すぐ後ろのテントへ，カメラをとりにいった。もどってくると，雪男は反対の右側斜面へ，谷のほうを向いて２本足で降り始めていた。ファインダーをのぞきながら，服部さんはシャッターを３回押した。

旗のところへいってみると，足跡が残っている。長さ15センチぐらい，ちょうど指を第２関節から折り曲げた人間の手のような形だったという。服部さんは，足跡も３枚写真にとった。

ダウラギリ第４峰への登頂は失敗に終わり，６月29日に帰国した服部さんは，さっそく問題のフィルムを現像した。ところが，雪男と足跡を写した６コマだけが，露出オーバーで写っていなかった。あわてたためのミスだろうという。

この雪男目撃談に対して，大阪府立大学の中尾佐助教授は，感想をこう述べる。中尾教授も，かつてマナスルで雪男の足跡を見ているのだ。

「その話はほんとうかもしれませんね。まず，服部さんが風下にいたというのがいい。野生の動物は感覚が鋭いから，人間が風上にいると，近寄ってこないんです。顔に気をとられて，全身の記憶がないというのも自然だ。写真が写っていなかったのは残念だが，もうひとつ残念なのは，テントにほかにだれもいなかったこと。ヒマラヤの高山にひとりでいると，よく幻覚や幻聴に襲われるからです」

と，服部さんが幻覚を見た可能性を留保するのだ。服部さんが見たものが雪男だったか，幻覚だったかは，撮影が失敗に終わったいまとなっては，判定の下しようもない。

この服部さんの経験より20日ほど前，直線距離にしてわずか６，７キロしか離れていない地点で，雪男の足跡を目撃した日本人がある。ダウラギリ第５峰（7618メートル）にいどんだ長野県の県陵山岳隊（矢崎源市隊長）で，４月13日，標高6000メートルの氷河で，長さ28センチ，歩幅105センチの足跡が，250メートルにわたって残っているのをカメラにおさめた。

ふたつの目撃現場が近いことと，時期的にも接近していることは，雪男の存在を考えるうえで注目に値しよう。

〝雪男の当たり年〟というわけでもないのだろうが，もうひとつその名もずばり「雪男探検隊」というのが，やはり日本からエベレスト山麓のソロ・クンブ地方



へはいった。

隊長の谷口正彦さんは32歳，日本テレビの運動部員だったが，会社をやめて，雪男捜しに踏みきった人である。昨年末からことしの５月にかけて探検した谷口さんら一行５人は，雪男とお近づきになるために，風変りなテクニックを用いた。

雪男の知能指数は，人間の２，３歳に当たると想定し，幼児が興味を示す風車や鏡をつるして，おとりにしたのだ。生きたニワトリのおとりも使った。

テントを張ると，それだけで警戒されると考えて，雪男が出そうな雪原では岩陰で野宿——朝になるとスリーピング・バッグの上に，すっぽりと雪が積もっていることもしばしばだった。

こんな涙ぐましい努力にもかかわらず，谷口隊は数か月の滞在中に，雪男の姿を見かけることはできなかった。それでも３月７日の午前４時ごろ，隊員の尾崎啓一カメラマンが，ドゥドゥ・ポカリという湖のほとりにある無名峰で，標高5300メートルの雪の斜面に，３キロも続く足跡を発見している。次ページの写真は，そのとき尾崎カメラマンが写したものだ。

谷口隊はほかにもいくつかの資料を持ち帰った。パンボチェのラマ教寺院にある雪男の頭皮から抜き取った数本の毛。雪男を描いたブータンの切手。カトマンズの画家に描いてもらった雪男の絵。そして雪男伝説の収集である。

足跡，頭皮，伝説こそは，雪男の可能性を暗示する〝証拠〟なのだが，もしあなたが次のような質問を受けたら，どうお答えになるだろうか。

(1)　雪男はほんとうに存在するでしょうか？

(2)　雪男はどんな動物だとお考えですか？

実は，これは1959年に，日本モンキーセンターが行なった，アンケートの質問項目なのである。動物学者など12人が回答しているが，今泉吉典・国立科学博物館技官，桑原武夫・京大教授，古賀忠道・上野動物園長（すべて当時の肩書）ら９人までが，「たぶんいる」または「いる」と答えている。「いない」と答えたのは，亡くなった高島春雄氏（山階鳥類研究所）ら３人である。３対１の割合で，「いる」と考える人が多いのだ。

さて，雪男はいるかいないか，あなた自身が判断を下すためには，もっと材料が必要である。ここで，これまでにわかっている雪男のデータを少し詳しく検討してみよう。

雪男は赤茶色の毛をもつとんがり頭？

名前の由来　６ページの表は，いわゆる文明人と雪男との，おもな出会いの記録である。

1887年にＷ・Ａ・ワッテルというイギリス人が，シッキムとチベットの国境にある標高5000メートルのドンキャル峠で，雪上に残る足跡を目撃した。ワッテルは後に出版した「ヒマラヤの冒険」という本のなかで，

「チベット人は，この足跡は毛むくじゃらの人間のものだといっている」

と報告した。これが雪男に関する最初の記録とされているが，この段階では，まだ統一された呼び名はなかった。

英語国でアボミナブル・スノーマン（abominable snowman）——「忌まわしき雪男」という名まえが確立したのは，1926年以来である。当時，インド北部の町ダージリンに住んでいたイギリス人ヘンリー・ニューマンが，チベット語の「メティー・カンミ」から翻訳したものだという。カン＝雪，ミ＝人間を意味するから，カンミで雪男または雪人間である。

もうひとつ，イエティ（Yeteh）という呼び名も，かなり一般的である。北部ネパールの高地に住むシェルパ族のことばで，イエ＝岩場，ティ＝動物，つまり岩石地帯のけものということになる。

シェルパたちは，外国の登山隊と行動をともにしているとき，雪上に問題の足跡を見かけると，「イエティだ，イエティだ」と恐怖にかられて叫ぶのである。

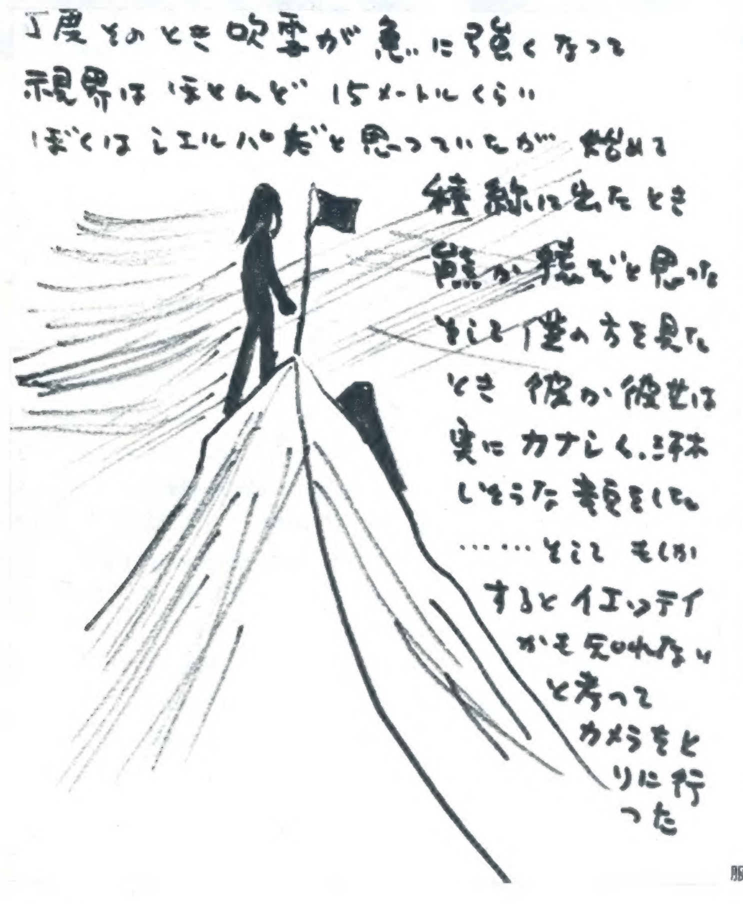
イエティは２種類あって，２，３メートルに達する大きなやつをチュティと呼ぶ。もうひとつの1.5メートル前後のやつをミティという。ミ＝人間，ティ＝動物だから，直訳すると「人間動物」——これこそ「人間に似た未知の動物」ということになりそうである。

日本に「雪男」が紹介されたのは，おそらくアボミナブル・スノーマンからの翻訳で，戦前のことだろう。どういうわけか，忌まわしき（アボミナブル）という形容詞が失われて，雪男だけで通用した。ところが，日本にはむかしから，独自の雪女伝説があるため，日本人は雪女の連想から，雪男も空想上の存在と片づけがちだ。しかし，ヒマラヤに雪男がいるかどうかは，いつの日か結論が出る科学上の問題なのである。

地元の伝説　いま東京にダワノルブ君という，20歳のシェルパ青年が滞在している。引退した有名な山岳ガイド，アンタルケイの４男で，現地でかれの父親を取材した上智大学の学生とともに来日した。カトマンズ大学で物理や数学の勉強をしたシェルパ族のインテリである。

まず，ダワノルブ君の雪男に関する証言から——

「小さいころから，悪いことをするとイエティがくるよ，と聞かされて育った。７つか８つのときだった。家にいたチベット人の召し使いが，イエティの話をしてくれた。もし山でイエティに会ったら，必ず下へ逃げろというんです。なぜならイエティは大きなオッパイをもっているから，じゃまになって下方が見えな



服部さんが帰国後に描いた雪男のスケッチ



ソ連の学術探検隊がパミールで目撃した雪男らしい動物の姿（「ソビエト同盟」誌より）



1954年，イギリスの「雪男探検隊」が現地人の話をもとに描いた想像図

い。上へ逃げようものなら、オッパイを肩にかついで、すごい勢いで追っかけてくるというわけです」

ユーモラスな伝説だが、英語で話すダワノルブ君は、イエティの存在を確信している。

「ぼくは実物を見たことはない。シェルパの若者も見ていない。イエティの数が減って、ますます山奥へはいりこんだからだろう。しかし、ヤクを放牧して山地を歩いたシェルパの老人は、イエティを見たという人が多い。むかしは5000メートル以上の高山で修行をしているラマ僧のところへ、イエティが食べ物を運んできたという話もある」

ところで、イエティはどんな姿をしているのか。著名なシェルパ、テンジン・ノーケイの父親が目撃している。エベレストの西南方，海抜4900メートルにあるマチェラマ村のヤク牧場で、イエティに会ったのだ。

「夏のある日，谷底へ家畜をつれて降りていくと、突然家畜が恐怖状態に陥った。オオカミかヒョウでも襲ってきたのかと見まわすと、山腹をとびはねながら駆け下ってくる動物がいた。その動物は身長1.5メートルほどで、全身赤茶色の毛で覆われている。頭は円すい形で，長い髪が目のところまで垂れ下がっている。顔つきはサルに似ているが，唇がバカでかく，鋭い歯がのぞいている。人間のように2本足で歩いてくる」（レーフ・イザード「雪男探検記」より）

老テンジンが家畜とともに石小屋に逃げこむと、イエティは屋根にとび上がって，屋根板をはがしにかかった。老テンジンはネズの生枝を燃やし，トウガラシの粉を投げ入れて煙をたて，そのおかげで助かったということである。

現地に伝わるイエティ像は，ここに描かれたものとほぼ共通するが，からだはがっちりしており，近づくとジャコウネコのような強い悪臭がするともいう。

頭皮の秘密

第2の手がかりは，雪男の頭皮である。パンボチェ（4200メートル），クムジュン（3900メートル），ナムチェバザール（3800メートル）にある3つのラマ教寺院に，「雪男の頭皮」が保存されていることがわかったのは，1953年である。どれも200～350年前から伝えられたものだという。（下の写真参照）

1959～1960年に現地へいった，日本雪男学術探検隊の小川鼎三隊長（当時東大医学部教授，比較解剖学）は，3つの頭皮をつぶさに研究した。パンボチェのものについて寸法をあげると，周囲＝68センチ，長さ＝25センチ，横幅＝17.5センチ，高さ＝18.5センチ，そして頭皮の厚さは4ミリである。

「いずれも古い乾固した皮膚より成り，帽子状でらくにかぶれる大きさである。動物の頭皮としては著しく上方にとがっていることと，正中部にとさか状に毛の集りをみることが特異である」

と小川教授は報告している。

1961年にイギリスのヒラリー隊は，ラマ僧の監視つきで，この頭皮を世界各国に持ちまわり，各地の学者に研究させた。だが，なんという動物の毛か断定した者はなかった。すでに地球上で絶滅した動物の数は多いから，現存するどの動物の毛だと断定できなくても，不思議はないのだそうである。

ことし，谷口さんがパンボチェ寺院から持ち帰った数本の毛を，科学警察研究所の須藤武雄主任研究官が分析した。

「動物の毛は顕微鏡で見ると表面の紋様，皮質と髄質の比率などが，種属によってみんな異なるんです。人間や類人猿は，皮質の部分が多く髄質が少ない。四足獣はその反対です。パンボチェ寺院の毛は四足獣のもので，表面の紋様からみてクマに近い動物のものだと思う」



というのが須藤さんの鑑定である。

コブウシのコブだという推測もあり，現在までのところ，これらの「頭皮」はカモシカのような有蹄（ゆうてい）草食獣の毛皮から，人為的に加工されたにせ物だというのが定説になっている。

重大なカギを握る〝シプトンの足跡〟

足跡の分析

雪男の足跡は，第3のもっとも重要な手がかりである。先進国の人間が，ヒマラヤの雪男を本気で問題にするようになったのは，1951年11月7日，イギリスのエリック・シプトンが，氷河にはっきりと残された，正体不明の足跡を撮影してからのことである。

エベレスト登頂の準備踏査にいったシプトンは，ガウリサンカール（7145メートル）のふもとにある，メンルン氷河を下っていた。

「時間はちょうど4時半だった。ふいにセン・テンジンが叫んだので注意すると，少なくとも2頭以上の入り乱れた足跡が続いていた。日時がたったためか，足跡の大部分は雪がとけて形がくずれ，どれもこれも卵型になっていた。大きさはわれわれの登山グツよりいくぶん長く，幅は非常に広かった。最初発見したあたりは雪が浅く，足跡がはっきりしなかったが，ただ1か所，形がくずれないで残っているところがあった」

とシプトンは「エベレスト踏査1951」のなかで，発見当時のようすを書いている。この足跡は長さ32センチ，幅16センチぐらいである。（写真参照）

ここで下の図をごらんいただきたい。左から順にクマ，オランウータン，ゴリラ，シプトンの雪男，古人類，ヒトの左足の跡である。

動物の足指は，一般に親指から退化する。そして小指，人さし指，薬指の順で退化し，最後に中指が残る。この図を見ても，クマの親指がいちばん退化していることがはっきりする。オランウータンやゴリラでは，親指が横へとびだし，ヒトに近づくほど親指は前方へつくようになる。

この進化の跡をたどると，シプトンの雪男は類人猿より進化しており，古人類に近いものだということになる。もし，シプトンの発見した足跡をもつ動物がいるとすれば，類人猿から人類に進化する過程のミッシング・リンク（失われた環）がみごとに結ばれることになるのだ。だからこそ，小川教授も，

「シプトンの写した足跡は，人類学上きわめて重大な存在であり，実在の可能性が1パーセントでもあれば，探索する価値がある」と強調する。

小川教授といっしょに，日本雪男学術調査隊に加わった林寿郎（当時多摩動物公園長）さんも，著書「雪男」のなかで，「私は，いまでもシプトンの足跡が偽物でないかぎり，雪男の実在をかたく信じている」と結論している。

ここで「偽物でないかぎり」と条件がつくのはわけがある。かつてイギリス人が，学界をだまくらかした〝前科〟があるからだ。

イギリスはサセックス州ピルトダウンで，頭骨の破片，下顎（かがく）骨の右半分，歯などが，ドーソンという法律学者によって発掘され，復原して1912年に公表された。この頭骨は現代人に，下顎骨はサルに似ているところから，サルからヒトへの進化途上の化石人骨として，ピルトダウン人または曙原人の名で，40年間も学界で通用した。

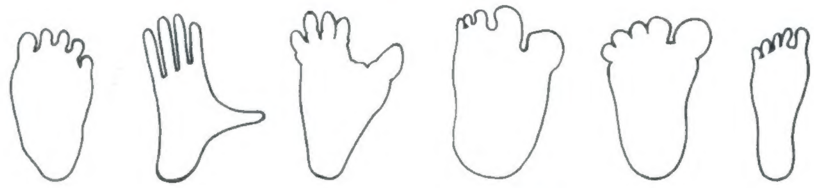






右上　クムジュンのラマ教寺院にある雪男の〝頭皮〟　（谷口隊撮影）
右下　1951年，エリック・シプトンが撮影した問題の足跡　（エベレスト山岳財団提供）
下　雪上に続く足跡　（谷口隊尾崎啓一カメラマンが3月7日に撮影）

足跡の比較





ところが，放射性元素やフッ素の量を調べたり，X線で検査する化石の調査技術が進歩した結果，これはまぎれもないにせ物だということが判明した。1953年のことである。

それはともかく，シプトンの足跡写真ほど明瞭ではないが，ヒマラヤの雪上に二足獣が残したようにみえる足跡の目撃例は，数えきれないほどである。それらはどんな動物が残したのだろうか。

四足獣でも雪中では，前足の跡へあと足を運ぶことが多い。そのほうが歩きやすいからである。当然，その足跡は，前足とあと足のダブルプリント（重複）になるわけだ。ちょっと見ると，２本足で歩いたように見える。これまで写された雪男の足跡には，こんな例も多いという。また，「キツネがピョンピョンと雪の上をはねていった場合，太陽に照らされた４つの足跡が１つにとけあい，大きな二足獣が通った跡のようになる」という，シカゴ・リンカン動物園のマリン・パーキンス園長の報告もある。

ヒマラヤの山中といっても，緯度は九州の南端より低いから日光は強烈である。そこで雪に残されたいろんな足跡が，どんなぐあいにとけるものか，まだ現地での科学的な研究は行なわれていない。

雪男は〝失われた環〟をつなぐ生物か？

雪男の故郷

雪男の足跡は，多くが5000～6000メートルの雪上で発見されている。この極寒の地で哺乳動物，とりわけ類人猿よりも進化した動物が，生存を続けることができるのだろうか。雪男の故郷は，いったいどんな環境なのか。

マナスル東尾根で，雪男の後ろ姿を遠望したという竹節作太さん（当時毎日新聞社員）は「ヒマラヤの旅」にこう書いている。

「ヒマラヤといっても，雪と氷におおわれた山ばかりではない。マナスルを例にとってみると，４月から11月ごろにかけては，4600メートルまでは雪がなく，ツツジやシャクナゲが茂り，高山植物のお花畑になっている。また4000メートル辺には，ダケカンバやネズの林がある。

ナキウサギ，シカ，ヒツジ，ヤギ，山七面鳥が群をつくってやってくるし，オオカミ，ユキヒョウ，ヒマラヤグマなどもいることは，その足跡でわかった。雪男が住もうと思うなら，決して悪い条件ではない」

雪男の足跡が5000メートル以上の地点で見つかるからといって，かれらの生活の場が，極地的な地帯だとはかぎらない。現に雪上の足跡は，２つの地点を結ぶ最短距離をたどっていることが多い。これは，えさになる小動物を追った〝生活の跡〟とは考えられないのだ。

むしろ，雪男の生活拠点は，3900メートルの森林限界以下だろうという見方が有力だ。雪男がＡ部落からＢ部落へ，用事で出かけるといった特殊な場合にのみ，雪山を越えて，跡を残すのではないかというのである。

雪男捜しの経験をもつ林さんは，かれらの故郷をこんなふうに想像している。

「いくら雪男でも，えさのない雪のなかにいつも住んでいるとは考えられない。寒い季節には，住みよい森林地帯におりてくるのではなかろうか。森林地帯近くの日当りのいい断崖絶壁，こんな，人間の近づけないような岩穴に住んでいるのではなかろうか。そして，木の実，芽，草の根のほか，動物質のえさも食べる雑食性ではないかとわたしは考えている」

あるイギリス人の算定によると，ネパール北方の山麓だけでも，１万3000平方キロ（新潟県ぐらいの広さ）の広大な人跡未踏の森林地帯があるという。

雪男の正体

雪男は，足跡が多く見つかるのに姿はまれなところから，夜行性ではないかという推測がある。しかし，霊長類では，ごく一部の原始的なサルをのぞくと，夜目はきかない。

雪男が人間に近い動物なら，夜行性と考えるよりは，目も耳も嗅覚（きゅうかく）も人間よりすぐれているため，先に気づいて隠れてしまうと考えるほうがよさそうだ。

ナゾの足跡の持ち主には，次の３つが考えられるだろう。①未知の動物，②人間，③既知の動物。

まず，①未知の動物説：これは，シプトンの足跡が暗示する原始人類のことである。サルからヒトへの「失われた環」をつなぐ生物が，現代人の目をのがれて生存している可能性はゼロではない。

②人間説：北京原人やネアンデルタール人の子孫が，秘境でひそかに生き長らえているという説。ことし，雪男を捜しにいった谷口さんなどは，

「北京原人の化石が発見されたチオウコウティエン（周口店）からは，そう遠いわけではないし……」

と考えている。

もっと人間くさい話もあって，チベットの犯罪者が山中にのがれて，平家の落人部落のように暮らしているのだとか，深山にこもったラマ教の修道者が足跡を残すのだという説もある。

③既知の動物説：シプトンの撮影した足跡を見せられたとき，大英博物館の動物学者は，ラングールザルのものだろうといい，ロンドン動物園では，ヒマラヤグマだろうといった。

たしかに両方ともネパールにすんでいるが，残念なことに足跡はまるで違う。第一，シェルパはどちらもよく知っているから，見まちがうはずがない。ほかにユキヒョウ説もあるが，根拠は弱い。

ここで本誌『仲間のひろば』欄へ寄せられた説を紹介しよう。西宮市に住む獣医師・木村光生さんは，オオパンダ（ジャイアントパンダ）説なのである。

本号の本文カラーページをごらんいただけばわかるが，オオパンダは中国のスーチョワン（四川）省西北部などにすむ，身長150～180センチの珍獣である。2500～3000メートルの高地にすみ，タケやササの葉を常食とする。ときには，小型の動物や魚も食べる。

「ヒマラヤの高山にもササははえているし，白と黒のブチだから雪の上にいても人目につかない。わたしは，２本足でも立つオオパンダこそ雪男だと思う」

と木村さんは力説する。だが，オオパンダは歩くときは，足うらの一部だけを地面につける半蹠行（しょこう）性だというところに難点があるようだ。

もうひとつ有力なのは，多摩動物公園の小森厚飼育係長が唱えるオランウータン説である。小森さんは例証として，まずゴリラをもちだす。

「アフリカのゴリラは，低地の密林にすむローランドゴリラと，雪線近くの高山にすむマウンテンゴリラとあるんです。元は同じものだが，何かのつごうでそうなった。それと同じことがオランウータンにも起こったのではないか。

化石が出ることからもわかるように，オランウータンはかつて中国大陸にすんでいた。それが人類に追われて，ひとつは低地の森林にのがれ，現在はスマトラとボルネオに残っている。もうひとつはヒマラヤの高山にのがれて，雪男になったのだろう」というのである。


谷口隊はこんなおとりを仕掛けて雪男を待った

身長からいっても，赤茶色の長毛という雪男の特徴からいってもぴったりである。ただ，オランウータンの足跡は，シプトンの写した足跡とは異なる。しかし，オランウータンが地上を歩くときは，指が足うらのほうへ折れ曲がった形になるので，雪にどんな跡がつくかちょっと見当がつかないのである。

×　　×　　×

今春，ヒマラヤへ登山した17隊のうち，11隊までが日本隊だった。このぶんだと，雪男を発見する確率は，世界じゅうで日本人がもっとも大きいといえるかもしれない。

女子栄養大学の小原秀雄教授は，無計画な雪男探検より，ヒマラヤを生態学および地誌学的アプローチで究明することが先決だという。

大阪府立大学の中尾佐助教授は，立体カメラを使って雪男の足跡を撮影し，連続した足跡の実物模型を日本で復原することを提案する。これができると，多くのことがわかるというのだ。

谷口正彦さんは，いま２度めの雪男探検計画を練っている。

さて，あなたは雪男がほんとうにいると思いますか。いるとすればそれはどんな動物なのでしょうか。■

（本誌編集部　上田記者）

雪男のおもな記録

	発見者	場所	対象
1887	W. A. ワッテル（イギリス）	ドンキャル峠　5000ｍ	足跡
1906	H. J. エルウェス（イギリス）	チベット　？	姿を目撃 スケッチをしたが四散
1921	H. バリー（イギリス）	チベットのラクバ峠　6300ｍ	足跡
1925	A. N. トンバジー（イギリス）	カブルー山麓　4500ｍ	姿と足跡
1937	J. ハント（イギリス）	シッキムのゼム峡谷　5800ｍ	足跡
〃	H. W. ティルマン（イギリス）	カラコルムのビアホ氷河	足跡
1942	S. ラウィッツ（ポーランド）	チャムビ渓谷	赤茶色のクマとオランウータンのあいのこのような姿
1949	H. W. ティルマン（イギリス）	ランタンヒマール　5700ｍ	足跡
1951	E. シプトン（イギリス）	メンルン氷河　5800ｍ	足跡
1952	E. W. デュナン（スイス）	クンブ氷河　5700ｍ	足跡
〃	竹節作太（日本）	マナスル東尾根　5300ｍ	足跡と後姿遠望
1953	E. ヒラリー（ニュージーランド）	クンブ氷河　5700ｍ	足跡
1954	R. イザード（イギリス）	ソロ・クンブ　5000ｍ	足跡



アライグマ科　*Procyonidae*

アライグマ科の動物の体長は、種によってまちまちである。最大はオオパンダの180センチ、小型のものではハナグマの50センチである。また、からだの色調も一様ではない。

しかし、以下のような共通点をもっている。

- 四肢（しし）にはそれぞれ5本の指。
- 雑食性。
- 歩き方は蹠行（しょこう）性，あるいは半蹠行性。



オオパンダ。アライグマ科。
無心に遊ぶ子どものようにくつろいで
大好物のタケを食べている。
パンダとは，ネパール語のネガリャーポニャ
《タケを食う者》からきている。
PH. RUSS KINNE-PHOTO RESEARCHERS

アライグマ科の分布図。紫色は，オオパンダ，ショウパンダの生息地を示す。中国のスーチョワン（四川），カンスー（甘粛），ユンナン（雲南）の各省，および北部ビルマ，北部インド，ネパールがふくまれている。緑色は，パンダ類をのぞいた，すべてのアライグマ科の生息地である。

●オオパンダをのぞいて、長いふさふさした尾をもつ
●多くが森にすみ、樹上生活者である。
●歯式は、門歯3／3、犬歯1／1、前臼歯（きゅうし）3（4）／3（4）、臼歯2／2（3）で、歯数の合計は40本を越えない。

アライグマ科は、パンダ亜科とアライグマ亜科の2つの亜科に分かれる。

パンダ亜科には、オオパンダとショウパンダの2属2種があり、いずれも中国がおもな分布地域である。中国の学界では、オオパンダを独立の科、オオパンダ科とし〔注1〕、ショウパンダはアライグマ科のなかにはいる。

アライグマ亜科の動物は、6属12種を数え、すべて南北アメリカ大陸に分布する。





オオパンダ属 *Ailuropoda*

オオパンダ

Ailuropoda melanoleuca

《世界の珍獣、珍獣のなかの珍獣》、これがオオパンダへの形容詞だ。動物に興味のない人でも、この動物をひと目見れば、たちまちそのとりこになってしまうほど魅力に富んでいる。クマのもつあいきょうのあるふんい気、ぬいぐるみ人形と見まがう白と黒の色分け模様などが、人びとを強く引きつけて離さない。

珍獣といわれるゆえんは、もう1つある。それはこの動物の絶対数が少なく、動物園はもちろんのこと、生息地の中国でもめったに見かけることができないという事実だ。

オオパンダの体長は、150～180センチ、体重は150～180キロ、肩高は65～75センチ、尾長は約20センチである。

全体にずんぐりと太っていて、からだの色は、大部分が乳白色で、両耳、両目のまわり、四肢（しし）は黒く、つやがない。前肢の黒い部分は肩の中央へとつながって、太くて黒い、一種の肩掛けのような形になっている。頭部から首、腰は乳白色で、腹部は灰白色になっている。

頭骨は大きく、額（ひたい）は平たい。また頭頂骨もひろがって大きい。鼻骨は、クマにくらべると短く、上に突起しており、鼻づらの部分は比較的小さい。

四肢の長さは一様で、足の指は5本。小さな第1指をのぞくと、いずれも同じ大きさだ。つめは出し入れができない。前足のうら、手首の部分には3.5センチ幅の発達した種子骨があって、一種の親指の働きをしている。この骨は、かたい肉でおおわれ、他の指に向きあっているから、オオパンダは、小さなものも、細いものもつかんで、口に運ぶことができる。足うらには、黒い長毛が密生している。

歯式は、上下のあごの片側で、門歯3／3、犬歯1／1、前臼歯（きゅうし）4／3、臼歯2／3、歯数の合計は40本である。犬歯は短く、その切れあじは鈍い。しかし、前臼歯、臼歯はよく発達し、上あごのほうは、いずれも2、3の突起面をもち、下あごの歯の突起と咬（か）みあっているから咀嚼（そしゃく）力は非常に強い。

分布は、カンスー（甘粛）省最南部のウェン（文）県から、スーチョワン（四川）省西北部の山地とユンナン（雲南）省クンミン（昆明）までの、東経102～105度、北緯25～32度50分の範囲である。

大好物はタケ

これらの地方は、いずれも海抜（かいばつ）2600～3500メートルの高山で、オオパンダは、そこの竹林（ちくりん）にすんでいる。温度と湿度の変化の激しいところで、冬は零下10°～プラス6°C、夏には30°Cにも達する。また冬期をのぞけば、雨が多く、年降雨量は、533～1877ミリである。

オオパンダは、極寒（ごっかん）と酷暑（こくしょ）が苦手（にがて）で、冬と春は、3000メートル以下の場所で寒さをしのぎ、夏と秋には、また3000メートル以上の高地にもどる。

アジアの屋根といわれるくらいの高地だか

オオパンダ。別名，シロクロクマ，イロワケクマ。
中国では，タアマオシュン（大猫熊）という。
おもちゃのように見える，このあどけない動物も
体長150～180センチ，体重150～180キロの巨漢である。
動物園でしか見られない珍獣の1つ。
PICT. VOLLMAR I.L.I

ペイチン（北京）動物園では，パンダを入れるとき
完全冷暖房の部屋を用意したという。
ホースの水をあびているのは，反修君だ。
「……アア、イイキモチ。ススシイナー」
撮影　秋岡家栄

ら、冬と春に低地におりても寒さはきびしい。こんなときには、シラカバやベニカバに登って太陽にからだをさらし、樹上に横たわって寝ている。6、7月でも大雪があり、気温が0℃近くになるが、竹やぶが自然の雁木〔アーケード〕になって、動くのに不自由はない。

夏の暑い盛りには、川へおりて水を飲み、広い川でも泳ぎ渡ってしまうという。

オオパンダの好物は、タケ類で、成獣になると、これを1日に15～20キロも食べる。タケはモウソウチク、マダケ、クロチク、マチクなど、またネザサも好きだ。タケノコ、葉、茎を前足でつかみ、地面にすわりこんで食べる。タケは、直径3センチのものであっても、簡単に咬みくだく。

半年から1歳半ぐらいまでの幼獣は、若ダケの葉を喜び、3歳半以上の成獣は、かたいタケのすじを食べる。

消化力は、非常に早く、12～18時間で排泄してしまう。また、歩きながら食べ、歩きながら排泄する習性がある。

タケにふくまれるカロリーが少ないためか、オオパンダは1日に10～12時間を食べることに費やしている。タケばかりではなく、リンドウやサフラン、アヤメ、あるいは、小さい哺乳（ほにゅう）動物や魚をつかまえて食べることもある。飼育下では、ウシの乳、米飯、タケノコ、くだものなどを食べる。

オオパンダはふつう、交尾期をのぞけば単独生活をしている。交尾期は、必ずしも一定していないが、一般には春が多く、晩秋に出産する。妊娠（にんしん）期間も一定していなく、夏や秋に出産した例もある。それは、受精卵の子宮粘膜への着床が遅れるためであるが、だいたい5か月といえる。

交尾期には、多くの雄が雌を求めて争う。発情した雌は、不安なおちつかないようすで、ときおり叫び声をあげ、食欲も不振になる。雌の生殖器は赤くはれ、石や木の枝にうつ伏せになって、生殖器を摩擦している。

1産1子で、生まれたばかりの子は、体重約140グラムだ。その後3，4年で成獣になる。

オオパンダは、ふつう、固定したすみかをもたず、木のほらなどにすんでいる。

聴覚、視覚はあまり発達しておらず、嗅覚（きゅうかく）だけが比較的鋭いが、それにしても、他の動物ほど鋭敏というわけではない。

おとなしい性質で、他の動物を襲うことはなく、自衛する力も弱いようだ。冬眠はしない。寿命は、20～25年である。

オオパンダ狂騒曲

オオパンダが人間に知られるようになった





オオパンダの母と子。母親のリィリィに抱かれているのは，人工繁殖第1号の反修君。生まれたときは，《ミンミン》という名だったが中国文化大革命に参加して，《反修》と改名。1963年9月生まれの雄である。（上）

反修君は，ペイチン（北京）の人気者。きょうもおりから出て，あいきょうをふりまく。中国には，シャンハイ（上海），コワンチョウ（広州）クンミン（昆明），ターリエン（大連），ナンチン（南京）などの動物園にも，オオパンダがいる。（下）
提供　動物の科学研究会



27 −4

はじらいのオオパンダ。
「もういや！　そんなに見つめないて」
「あたし，はずかしくって」
オオパンダのポーズは，天真爛漫そのもの。
日本でも，１日も早く，この実物を見たいもの。
PH. F. VOLLMAR-A. L. I.

のは、かなりむかしのことである。中国の古文献には、ハイ・シュン（白いクマ）として記されている。中国がヨーロッパと接するようになってからは、宣教師などの手によって、その毛皮がホッキョクグマと誤ってヨーロッパへ紹介されている。

1869年3月に、動物に興味をもつフランス人宣教師、アルマン・ダビッド神父が、スーチョワン（四川）省を訪れたことから、ハイ・シュンの存在は裏づけのあることとして、ヨーロッパへ紹介されることになった。

そのいきさつは、ダビッド神父が、ある地主の家へ立ち寄ったところ、そこで、ハイ・シュンの毛皮を見せられた。その毛皮のみごとさ、奇妙さに、夢かと驚いた神父は、さっそくこの動物を生けどりにするよう、地もとの人びとに多額の賞金を出したのである。

結局、生きたままのハイ・シュンは手にはいらなかったが、数枚の毛皮と骨をヨーロッパへ送って、みずから学名を命名した（注2）。

それ以後、50年ほどの空白期間をおいて、オオパンダを求めて、多くのヨーロッパ人やアメリカ人がスーチョワン省の奥地へ足を運び、何頭かをつかまえている（注3）。

禁猟と人工繁殖の保護政策

現在、野生のオオパンダが、どのくらい生存しているかは、中国でもよくわからないようだ。そのかわり、オオパンダの生息地を禁猟保護区として、自然の繁殖を期待し、一方では輸出を禁止するとともに、ペイチン（北京）の飼育センターでの人工繁殖に力こぶを入れている。飼育センターで人工繁殖されたオオパンダは、各地に送られ、その数は、数十頭にのぼるという。ペイチンの動物園では、1963年9月に生まれた人工繁殖第1号の[illegible]（雄）が母親とともに、元気な姿を見せている。

中国以外の国にいるオオパンダは、わずか4頭で、イギリス1、ソ連1、北朝鮮2の各動物園で飼育され、人気を呼んでいる。

イギリスのパンダは、愛称チーチー（推定年齢約11歳の雌）。1958年、オーストリアの動物商、H.デンマーが、キリン3頭、サイ、カバ、シマウマ各2頭と交換に中国から手にいれ、しばらくヨーロッパじゅうの見せ物にしたあと、同年9月、ロンドン動物園に、約1万ポンド（1080万円）で売ったものである。

ソ連のオオパンダは、アンアンという雄で、ペキンから、1959年に送られている。

この両者は、二世をつくろうとする人間の願いをこめて、ロンドン、モスクワ間を往復して、見合いをさせられたが、いずれも不調に終わってしまった話は有名である。



[illegible]のも、ササノコやタケの葉、茎では[illegible]が低く、この体を維持するには毎日、15～20キロも食べなければならないからだ。[illegible]は20～25年

[illegible]



ショウパンダ属　*Ailurus*

ショウパンダ　*Ailurus fulgens*

ショウパンダ，別名レッサーパンダは，オオパンダ，つまり大きなパンダに対して，小さなパンダの意味なのだが，外見はオオパンダとは，似ても似つかぬ動物である。大きな飼いネコほどの大きさだが，毛皮が厚く密生しているため，実際よりは大きく見える。

体長は50～60センチ，尾の長さは40センチで，ふさふさとしている。体重は約4キロ。頭は大きいが，鼻づらは低く，平べったい顔をしている。目や耳も小さい。四肢（しし）はずんぐりとして，短く，鋭いつめは出し入れが自由にできる。歩き方は蹠行（しょこう）性で，足うらに黒い毛が密生して，すべり止めの働きをしている。

肛門腺（こうもんせん）は非常に発達していて，敵に危険を感じると，悪臭のある分泌（ぶんぴ）物を発射して身を守ろうとする。

歯式は，上下片側それぞれで，門歯3－3，犬歯1－1，前臼歯（きゅうし）3－4，臼歯2－2で，歯数の合計は38本である。

ショウパンダのからだは，背中とわき腹の部分と，四肢と下腹部とが，あざやかに色分けされている。からだの上部は，全体に濃い黄褐色だが，背部では，赤く輝いている。また，四肢と腹部の色は，黒くなっている。顔は，耳と目の上，両ほお，そしてあごが白くなっていて，顔だちにアクセントをつけている。尾には，白い輪状の紋が7，8本ついている。

おとなしい樹上の住人

ショウパンダの生息地は，オオパンダよりもさらに奥深い地域である。中国の西南部（ユンナン＝雲南＝省とスーチョワン＝四川＝省），ネパールとインド北部，それにビルマ北部にもすんでいる。これらの地域は，緯度のうえからは熱帯に近いが，海抜が2000～3000メートルに及ぶため，酷暑になる地域ではない。

タケやシ[illegible]などの混交林にすみ，川のそばや，谷地を好むようだ。早朝に出かけ，日中と夜の間は樹上で寝ていることが多い。雌雄のつがい，あるいは小家族で生活し，巣穴は，木のほらや岩の割れめなどにつくっている。

木登りの名人で，樹上を自由自在に動きまわるが，地面の上では，それと対照的にのっそりとしている。[illegible]の動きに似て頭を下げ

[illegible]
[illegible]ひねりのかな[illegible]それとも
[illegible]い祖国の静かな竹林[illegible]せせらぎを
思いうかべているのだろうか。
ロンドン動物園[illegible]
[illegible]



[illegible]
中国では，[illegible]
中国の西南部，ネパール，インド北部に分布し，
[illegible]で生活する。
学名は，[illegible]という意味。

PH ATLANTIC PRESS





で歩き、尻をつけてねむる。

草食の傾向が強く、タケの芽や実、果実、草木の根などを食べるが、昆虫[illegible]や鳥をつかまえることもある。前肢[illegible]を使って、食べ物を口に運ぶ。

交尾期は春。この時期になると雌雄は、大きな声[illegible]。妊娠[illegible]期間60[illegible]、1産[illegible]生まれる。[illegible]北部インドでは、自然条件が異なるため、交尾期は2、3月、出産は4月から5月中旬に行なわれる。

生まれた子ども[illegible]は、全長6センチ、体重は100グラムほどで、全身はまだ乳白色である。1週間後には、からだに色がつき始め、しだいに深紅色から褐色へと変化していく。目は25日間ほどは、閉じられたままである。

1年間は、親と生活し、次の子どもが生まれるころ、成獣として巣立っていく。

レッサーパンダの性質は、おとなしく、飼育はやさしい。[illegible]甘いもの[illegible]が好きで、[illegible]では人気のあるペットである。飼育には、まわりの温度を5°〜25℃に保つことが必要である。

冬眠をしない動物で、寿命は約12[illegible]

PHOTO: DRIVER/FOTOGRAM PHOTO: RIBOUD/MAGNUM

PHOTO: TEMMEL











キンカシュー属　*Potos*

キンカシュー　*Potos flavus*

18世紀[illegible]、[illegible]ある動物[illegible]物[illegible]、[illegible]の動物が、[illegible]目[illegible]それがこの[illegible]

動物学の専門家[illegible]、この動物を[illegible]いへん困ってしまった。ある学者は、これを[illegible]、ある学者は[illegible]一種だと思[illegible]名[illegible]つけられた[illegible]科の動物とはたいへん異な[illegible]アライグマ科に分類されている。

[illegible]の特徴は、アライグマ科の[illegible]

[illegible]で、[illegible]本[illegible]しか[illegible]いないこと[illegible]、歯は全部で36本である。5本の指には短く鋭いつめがあり、足のうらには毛がはえていない。尾はからだとほぼ同じ長さで約45センチあ[illegible]、[illegible]サルや多くの有袋[illegible]類の尾と同じように、ものをつかめる。

[illegible]までの高さは、20センチ、体重はおよそ2.5キロである。毛は密生して、細くちぢれ、[illegible]手ざわり[illegible]ドのようなつやがある。からだの色は金色がかった焦げ茶で、からだの上部には、褐色の光沢がある。また頭の後ろから[illegible]、尾のつけ根までのびている暗色の中心線が、[illegible]ついている。からだの下部は、茶色である。尾はつけ根では褐色だが、その半分から先は黒い。

長い舌で蜜を盗む

[illegible]は、アメリカ大陸の、メキシコの南部から[illegible]ブラジル中西部の高原[illegible]いたる地域[illegible]ている。大きな川が[illegible]流れる原始林に生息し、[illegible]大部分を森のなかで送る。[illegible]夜行性で、日中は木のまたに隠れて眠っている。

[illegible]





と短い脚（あし）、鋭いつめを、サルに負けないくらいじょうずに使う。けれども、地上では、足のうら全体をぺたりとつけて歩くので、その行動は、用心深く、わりあいゆっくりしているようにみえる。

キンカジューは、単独かつがいで生活している。まれに、群れをなしていることもあるが、それはとくに果実のたくさんある木にひかれて、仲間が集まったときである。食べ物は樹上生活の動物に典型的なものであり、果実、昆虫（こんちゅう）とその幼虫、鳥の卵といった樹上にあるものばかりである。とくに蜜が好きで、どんな狭い割れめでも、どんな小さな穴にも長い舌をのばして入れて、ミツバチの巣を荒らす。

キンカジューは1産1子で、まれに2子である。夏に生まれ、目は閉じている。10日で目をあけ、7週間くらいたつと、尾で木の枝にぶら下がり始める。寿命（じゅみょう）は20年以内である。

酒を飲んで悪酔いする

キンカジューは、飼育下では [illegible]

[illegible] いので、ふつうは、人間に忠実で愛情交換のできる楽しい仲間となる。昼の間は眠っていて、夜になると、パン、肉、果実、ゆでたジャガイモなど、与えられたものはなんでも食べる。水や牛乳を飲むが、蜜や甘いものが好きである。また、醗酵性の飲料には目がなく、飲むとすぐに酔って、ふだんはおとなしいこの小動物が、[illegible]あばれ始める。その怒りは狂気に近くなり、飼い主にとびかかり、そのからだにつめをたて、長い尾で締めつけたり、乱暴にかみついたりする。

ときどき家禽を盗むことがあり、ふつうは血を吸うだけで、肉を食べることはないが、たまに、前肢（ぜんし）の間にはさんで、食べる。食べ物を細かく歯できざみ、長い間かんで、いつもゆっくりと、ほかのことはまるでうわのそらのような格好で食べる。

あるナチュラリストは、すでに成獣に達した仲のよい雄と雌を、捕えて飼っていたときのことを話している。2匹はこのうえない愛情を示しあい、[illegible]抱きあって眠り、絶えず[illegible]愛撫しあい、[illegible]

カコミスル *Bassariscus astutus* [illegible]
キンカジューと近縁の種で、輪紋のある
ふさふさした長い尾と、大きな目が特徴。
夜行性で、木登りの名手である。
体長、尾長は、それぞれ約50センチ。
PIC WALT DISNEY PRODUCTIONS

ハナグマ属　*Nasua*

ハナグマ（coati）という名は、帯（ベルト）と鼻を意味するインディアンの2つのことばからきている。これはおそらく、この動物が、鼻を腹に押しつけて丸くなって眠る習慣をたとえていったものなのであろう。

その属名の *Nasua*（ナスア）というのは、「鼻」ということばだが、その長い鼻は、ブタやイノシシの鼻のようにのびて、その先は45度も曲げられるくらい柔軟性に富んでいる。

ハナグマ類は全長1メートル、その半分が尾である。からだは長く、横腹は平らで、脚（あし）は力強く、前肢（ぜんし）は目だって短いので、からだの後部が高くもち上がっている。指は、ほとんど指先までたがいにつながっていて、つめは強く、とくに後肢（こうし）では非常に発達している。首は太く、耳は小さくて頭のずっと後ろについている。肩までの高さは20～30センチ、雄の体重は10キロから11キロに達する。

ハナグマ属にはたくさんの変異があり、現在ではその生息地によって、2つのおもな種に分けられると考えられている。

ハナジロハナグマ *Nasua narica* は、オクラホマからメキシコ、グァテマラ、ホンジュラス、さらにコスタリカにまで生息している。山岳地帯が好きで、海抜2600メートルのところにいることもある。雌は雄よりやや小さめである。

その毛は厚く、黒褐色だが、腹部は黄色である。尾は、からだより明るい色で、輪のような模様が薄くついている。目は白でふちどられていて、鼻づらの先は白い。このため白鼻のハナグマ、とも呼ばれている。その分布域は、現在では、だんだん北のほうへ向かって、ひろがっているようだ。

アカハナグマ *Nasua rufa* は、パナマからアルゼンチンにかけての、熱帯アメリカの森にすんでいる。ハナジロハナグマよりも小さく、毛はもっと柔らかで、ときには絹のような手ざわりのある毛をもつものもいる。背中は、とくに焦げ茶色が強いが、頭や鼻づらは、灰色になっている。

母子のグループ生活

ハナグマ類は、雌と2歳以下の若い雄から成る小グループで行動し、何百匹もの大集団で移動することもある。

[illegible]

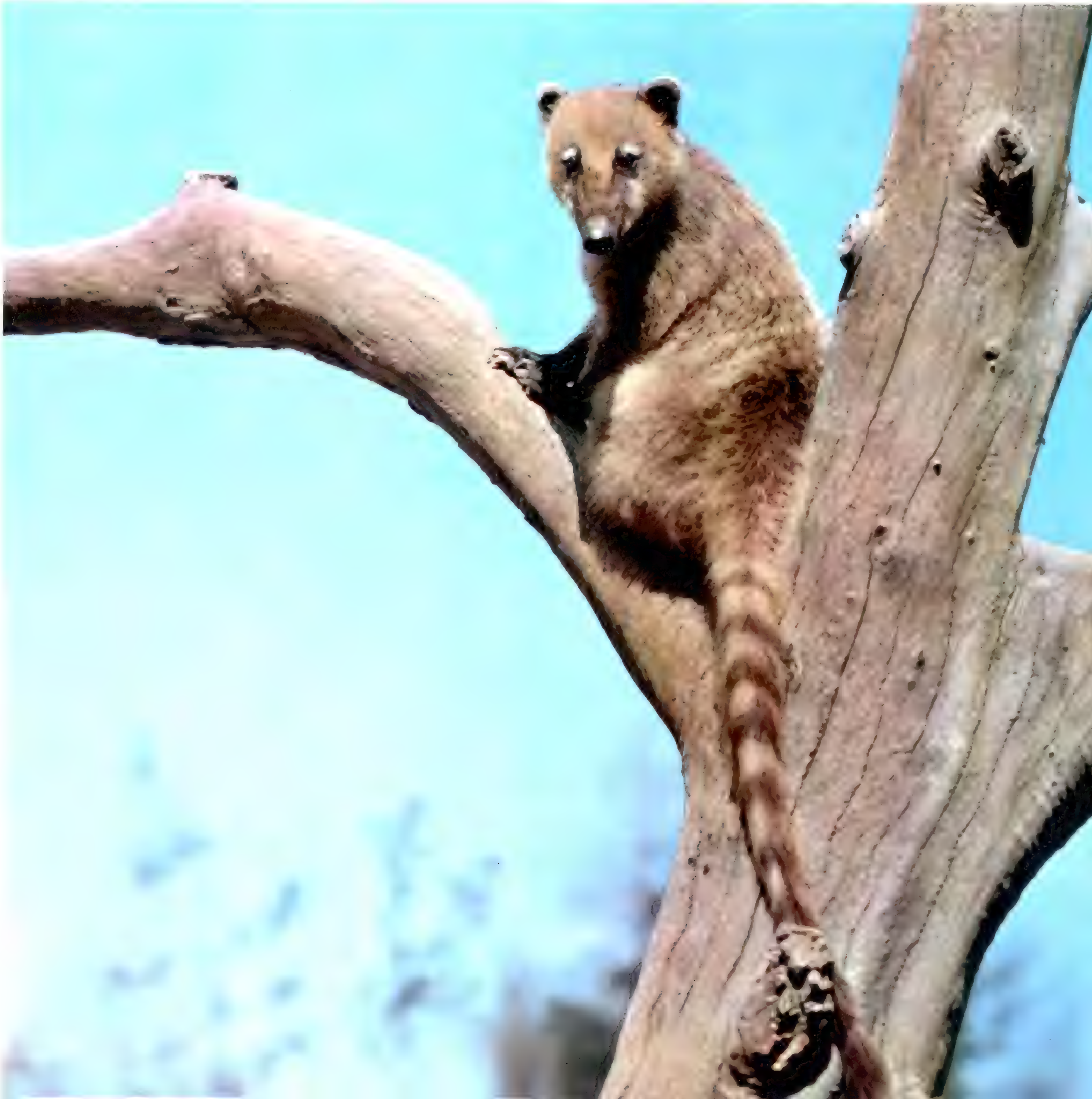
[illegible]
白の縁、目のまわりと鼻の白いところが特徴。
腹部は黄色く、からだの上部は黒っぽい。
[illegible]に分布し、
体長は約50センチ。[illegible]
[illegible]

単独の生活を送っていて、交尾期以外には、集団には加わらない。群れのなかでも雄と雌の行動が、非常に異なっているので、長い間、かれらはまったく違った2つの種だと信じられていた。

ハナグマ類は、昼行性の動物である。その群れは午前中騒々しく動きまわり、吠えたり、走ったり、地面を掘ったり、木に登ったり、たえずけんかをしている。非常に暑い昼下がりなどは、静かなところで寝ている。

仲間の1匹が危険を感じると、鋭いキイキイという声で知らせる。仲間たちはすぐに、いちばん近い木立ちのなかへ逃げる。試みに、竿でこうした木の1本をたたいてみると、ハナグマは枝の先のほうへ走っていき、地面にとびおりて逃げていく。ふだん木からおりるときには、頭を下にして、幹を伝わってすべりおりる。

地上では、ハナグマ類は、尾をまっすぐに立てて、足のうらを半分だけ地につけて歩く半蹠行（しょこう）性である。すわったり、後肢（こうし）で立ったりするときのほかは、足のうらを地に完全につけることはない。木の上では、その長い尾は、不完全にだが、ものをつかむことができ、またからだの平衡をとるのにも役だっている。泳ぐこともじょうずで、必要な場合には、川や急流を渡ること





ともするが、水は好きではない。それに、湿気や寒さには、とても敏感である。

長い鼻を曲げてなんでもあさる

ハナグマ類は雑食性である。ミミズや幼虫などを食べ、つめやブタのような長い鼻をつかって、土を掘ってこれらを見つけたり、木の上の、どんな小さな穴の中でも捜して、昆虫（こんちゅう）を見つけたりする。また卵を見つけると、かんたんに地面に落としてこわし、中身をかっぱらって食べる。

好きなものは、赤道アメリカの樹上にすむオオトカゲのイグアナである。果実も食べる。水を飲むときには、長い鼻をぬらさないように上に向けて、口を近づける。またハナグマ類は、アライグマのように、食べ物を口に入れる前に、水にひたす。

交尾期は晩春で、雄は、自分の属する群れにもどり、自分の雌を手に入れるため、仲間どうしではげしい戦いをする。雌はおよそ77日の妊娠（にんしん）期間のあと、夏に2〜6匹の子を生む。

子どもは、木のほらか、自然にできた穴か、岩がくぼんでいる場所といった隠れ家で生まれ、5週間たってはじめてそこから出るが、まだ足どりもおぼつかない。鼻の先を動かして、黒い小さい目はもの珍しそうに輝いて、周囲に興味を示す。

動作は無器用で、おずおずしているが、不思議なことに、ある種の大胆さがときどきあらわれている。危険が迫ったとき母親は、ネコのように、歯で子どものうなじをくわえて、わが家に連れもどす。

束縛をきらうペット

ラテンアメリカのいくつかの国では、ハナグマの肉が食用にされている。またこれを狩ることだけを、ただひとつの楽しみにして猟犬を連れて追いかける人もある。1匹のイヌだけでは、仲間から離れた1匹のハナグマにでも、勝つ見込みはないだろう。というのは、ハナグマは、歯でものすごく抵抗するからである。

ラテンアメリカでは、ハナグマを飼っている家が多くある。利口で、あいそうのよいこの動物は、人によくなれるが、束縛をいやがり、わがままな性質ももっている。あらゆる草食動物に見られるように、ふつうはおとなしくて飼いやすく、ほかの家畜ともたいへん仲良くなる。ただハナグマは、食事のじゃまをされるのがきらいで、たとえ飼い主であっても、怒りを隠さない。

ハナグマは、家畜を襲うことはあまりない。それは野生の自由の身であっても、食物が付随してきつい。動物の肉よりは、むしろ植物や昆虫（こんちゅう）のほうを好むことから、よくわかる。水をよく飲み、牛乳も好きだ。

ハナグマには、イヌのように芸を仕込むことができる。あるナチュラリストは、飼い主が鉄砲の音をまねると、倒れて死んだふりをするハナグマのことを報告している。好奇心が旺盛で、どんなすみずみまでも探検して、いたるところを掘り、脚（あし）で、または鼻を突っこんで、なんにでもさわってみるから、そういう点ではハナグマは、恐るべき破壊者である。そのうえ、臭気の強いにおいを発して、かなり不潔である。

多くのハナグマは、自分がどう取り扱われているかということにとても敏感である。なでてもらったり、毛をとかしてもらったり、また耳の後ろをかいてもらうのが大好きだ。満足すると、頭を下げてネコのように、人にからだをこすりつけて、うれしそうな一種のうなり声をあげて、満足した気持を表わす。

ブタのような長い鼻は、45度にも曲がって昆虫などの小動物を掘りおこす。
雑食性のおとなしい動物で、ペットにもなる。
メキシコからアルゼンチンにかけて分布。

アライグマ属　*Procyon*

アライグマ　*Procyon lotor*

アライグマは、ハナグマと同じくらいの大きさである。全長は1メートル、そのうち尾は40センチ、肩までの高さは30センチくらいである。からだはずんぐりしていて、頭蓋（ずがい）は大きく、鼻づらの短い、三角形の頭部をしている。2つの目は、接近してついている。大きな耳は、離れていて、先がまるい。脚（あし）は、全体からみると、長くて細く、足のうらには毛がない。足には先の細い指があって、鋭くはないが、かなりじょうぶなつめがついている。

アライグマは、半蹠行（はんしょこう）性の動物である。安定を保つために指をじゅうぶんに開いて歩き、後肢で立ち上がって立ったりすわったりするときだけ、足のうらを全部地面につける。

その毛並みは、厚く長くて、なめらかで、黒い縞のはいった黄色がかった灰色をしている。しかし1本1本の毛は手ざわりがあらく、3つの色のまだらになっている。根もとは褐色、

なかほどで黄色、先のほうは黒である。

頭は、からだのほかの部分より明るい色をしている。鼻づらは、ほとんど白に近いが、2つの黒いまだらが、両目を囲んでいる。脚(あし)は黒っぽく、足の先は明るい色である。ふさふさした尾には、黒色の輪があり、尾の先も黒い。

こうした色の違いは、あまり目だたないので、距離を隔(へだ)ててみると、全体が灰色に見える。この毛皮の色は、アライグマの生活しているまわりの樹皮や枯れ草とまぎれやすい。

ニューヨークのビル街にもすむ

アライグマは、カナダから中央アメリカまでの北アメリカ大陸全体に生息しており、森のなかの池や流れの岸に好んですむ。ふつうは砂漠(さばく)のような地方を避(さ)けるが、テキサスのサボテン林のなかで、見つかったこともある。

人間の多いところを避けるわけでもなく、そのうえ、現代文明というものにも平気なので、ニューヨークのどまん中、マンハッタン島にもいる。ごみ箱の残飯にひかれて、大陸とこの島を結ぶいくつもの橋を渡ってはいりこみ、ごみ箱をあさって歩く。だからアメリカ人のなかには、この動物の適応能力をたいへん買っていて、腐(くさ)った肉をあさるハクトウワシよりもむしろアライグマのほうが、アメリカのシンボルとしてはふさわしいと考える人もいるくらいである。

アライグマは、動作のゆっくりした動物であるが、木登りや泳ぎはうまい。日中は、木の枝や葉陰(はかげ)で眠って過ごす。天気がいいと、夕方には、たいてい1匹で、獲物(えもの)をとりに出かける。雨や雪や風の強いときには、静かに巣の中にいて、何日間もなにも食べないでいる。しかし天気がよければ、強敵のいない地方では、とくに日中でも夜と同じくらい活発で、疲れをしらずに、広い猟場(りょうば)を出歩く。

観察するとおもしろい動物である。頭を下げ、背を丸くして、尾をたれ、自分をとりまくものには、まったく関心のないようすで歩いている。何か気にかかるもの、たとえば獲物の手がかりでも見つけようものなら、まったくようすが変わってしまう。あらい毛を、平らにねかせて、大きな耳をぴんと立てる。そしてあと足で立ってながめてから駆(か)けだすが、さもないときは、とても信じられないような敏捷(びんしょう)さで木に登る。そして水平にのびる枝の上をサルのように走り、枝から枝へ、驚くような正確さでとび移っていく。

アメリカ合衆国の南部では、アライグマは1年じゅう活動している。しかし北のほうでは、秋にじゅうぶんな脂肪をからだにつけて、



アライグマ　アライグマは、
いつも好奇心でいっぱいの動物。
頭もよく、清潔を好むから、
ペットとして、かわいがる人もいる。
体長は40～60センチ、尾長は20～40センチ

PH. MARCONATO / ATLAS PHOTO





冬の大部分を浅い休眠状態で過ごす。アナグマのように、冬眠は完全なものではなく、飲食のために、穴から出ることもある。

仲間どうし仲のよい動物で、よくいくつかの家族が、同じ穴の中でいっしょに冬眠している。冬眠は、雪のとける4月から5月まで続く。

水にひたして食物を洗う?

アライグマは、雑食性の動物で、とても食いしん坊である。たくさんの果実を食べるが、野鳥や家禽も食べるし、卵には器用に穴をあけて、中身を飲む。魚やカニや軟体動物も大好物である。さまざまな鞘翅（しょうし）類（コガネムシ、タマムシなどの昆虫（こんちゅう）類）のふとった幼虫などは、たいへんなごちそうである。

食べ物が見つからないと、自分の巣から数十mのところまでも出かけていくことがある。多くの動物と同じく、季節によってえさが変化するので、その活動も変わる。夏には、水のひいた池や川を探り、ほとんど干上がってしまった水底にいる両生類をえさにする。

アライグマの、もっとも奇妙な特徴のひとつは、食物を水にひたして洗うような格好をするという習慣である。アライグマという名は、この習慣からきている。食べ物を口に運ぶ前に、水にひたして、前足でこするのである。この動作は、食事のたびに必ず行なうものではなく、また野生の状態よりも、飼育下にあるときのほうが、ひんぱんに行なわれることが観察されている。しかし、どうしてこういうことをやるかについては、まだ確かな説明はされていない（注4）。

唾液腺（だえきせん）がないから、水にぬらして消化をよくしているのだとも考えられた。しかしこれでは、じゅうぶんな説明とはいえない。というのは、魚類やザリガニといった、水のなかからとったばかりの水のしたたる食物でも、非常に熱心に洗うからである。

アライグマは好奇心が強くて、空腹でなくても、どんなに危険な場所にでもはいりこむ





こうした習性のため、窮地に陥ることもあるが、冷静に対処して難をまぬがれる。うなじをつかまえると、脚（あし）をだらりとたれて、からだ全体の力をぬいて、ちょうどオポッサム〔哺乳（ほにゅう）類、有袋（ゆうたい）目の動物〕のように気絶し、やがて目ざめるが、そのいたずらそうな小さい目は、周囲をキョロキョロして、折りがあったら逃げようとする。

この動物は、攻撃的というよりは、むしろ自分の負けを簡単に認める消極的な性格であり、そのおかげで生きながらえているような動物である。自分の思い定めた目的を達することができないとわかると、その渇望は無関心に変わり、その元気は、一足とびに、投げやりに変わってしまう。

アライグマの交尾期は、冬の1月末ころか2月のはじめである。秋、雌に照明を加えて、日照時間を自然状態より長くして、人工的に2度めの交尾欲を起こさせることがある。雄はいつでも交尾することが可能なので、年に2腹の子どもを得ることができる。

妊娠（にんしん）期間は、平均して63日間続く。雌は4月に、木のほらの中に準備しておいた巣の中で、3～5匹の子どもを生む。4週間で子どもは母親についてそこから出て、狩りのけいこを始めるようになる。3か月で成獣と同じ体長になるが、1歳になるまでは母親に守ってもらう。家族の巣から、子どもが最終的に去っていくのは、次の子どもたちが生まれるころである。寿命は、野生状態では10年くらいである。

あくことのない好奇心の持ち主

アライグマの毛皮の利用法は、デイビー・クロケット〔Davy Crockett　1786－1836　アメリカの開拓者で、アラモの砦で戦死〕によって有名になった。人間に狩りたてられているのは、あの猟師帽をつくるのが目的の1つ、もう1つはときどきニワトリ小屋へ侵入するため、また北方の森林では、猟師のわなからしかけたえさやわなにかかった獲物を横取りしてしまうためである。

利口すぎてわなにはかからないし、日中は隠れているので、夜にたいまつをつけて、その光でこれを狩る。特別に訓練したイヌがアライグマを追いかけて、ポツンと1本立っている木の上に追い上げると、そこを猟師が撃つのである。アライグマはいつも勇敢に応戦するが、できるだけ水のなかへ逃げこんで、戦う態勢をとり、アライグマより泳ぎのへたなイヌをおぼれさせようとする。

非常に小さいときにつかまえれば、アライグマは、ならすのにむずかしい動物ではない。率直に主人に愛情を示すことは決してないが、主人は主人として認め、温和で愉快な性質が愛情をひく。愛撫されるのが好きで、いつもふざけようとし、子イヌのような鳴き声をして、うれしさを表わす。その行動は一般に、自分の周囲で起こることに興味をもつサルに似ているところがある。

この生まれつきの好奇心は、家の中で放し飼いにしていても、見張っていないと、とんだことを引き起こす。えさに気を使う必要はないが、大食いのため、そこにあったものはくだものでもジャムでも、ニワトリやハトでも、なんでも口にいれる。固形の食物は念入りに洗って、砂糖のかたまりであっても、あと足ですわり、からだをのばしてから、口に運ぶ。

アライグマはなぜ、この動物を…前足を…つけるのか…人間にはその理由がわからない。食べ物を…洗っているわけではない。…のどろ…ひそむザリガニなどをあさる習性だという説が有力である。…2枚

PH. …　PH. HOLMES LEBEL

アライグマ　何者か、前に…いるのだろうか。腰を浮かして、前をうかがう。大敵の…でなければ、ますますたいていの動物ならば、知恵と…するりとかわして、…してしまう…

PH. HOLMES LEBEL

アライグマの巣は、…のほらである。…になると、さかんに食べて、…まるまると太る。しかし、…するのは、北方にすむものだけで、暖かい地方では、一年じゅう活動している。1産3～5子で、4月に出産する。…

PH. K. …



日本最大の食肉類　1

エゾヒグマの生態

犬飼哲夫

北海道にすむクマは、ユーラシアの寒帯に広く分布する、いわゆるヒグマ *Ursus arctos* の一亜種で、分類上、和名をエゾヒグマと称する。

ヒグマと同系統に属するものには、アラスカにすむ、アラスカヒグマ *U.arctos middendorffi*（別名、コディアクヒグマ）やアラスカからカナダとアメリカ合衆国に広く分布するハイイログマ *U.a.horribilis*（別名グリズリ）など7亜種があげられる。

ヒグマの毛色は、黒褐色が多く、その他、黒、黄褐色（緋色）、黄白色など、いろいろで、ヒグマとはいえ、緋色なのではない。また、本州のクマは、ツキノワグマといい、前胸部の三日月の白斑が特徴であるように説明されるが、これがまったく出ないツキノワグマがいるし、ヒグマのほうにも白い月形の斑紋が出ることもあるから、色と斑紋は、分類上の基礎にはなりがたいものである。

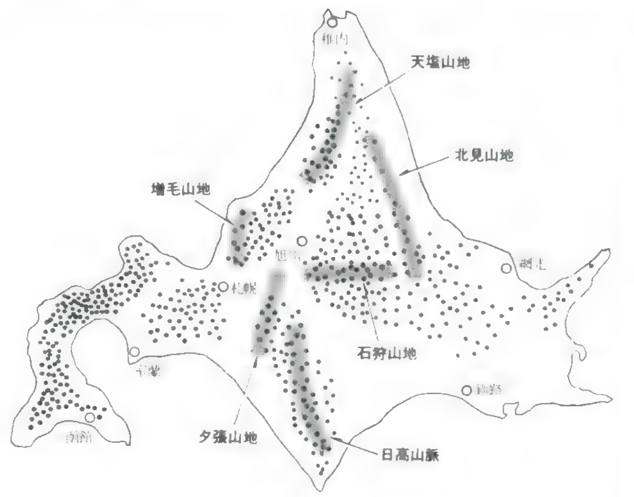
エゾヒグマ
Ursus arctos yesoensis

ヒグマ類のうちでも、やや小型で体長は200センチ、体重200～300キロ。雑食性で、北海道の山系に広く生息している。また南千島のエトロフ、クナシリの両島にもすむ。カラフトと北千島のシュムシュ（占守）島とパラムシル（幌筵）島には、きわめて近縁の亜種ベーリングヒグマ *U.a.beringianus* がすんでいて、エゾヒグマが北方系のクマであることを示している。

日本の動物相においては、津軽海峡が境界線となっているため、ヒグマが本州に、南方系のツキノワグマが北海道に自然分布していることはない。

エゾヒグマの体毛には2色あって、黒毛のものと赤茶色に分けられ、ふつう前者が大型で、つめはそれぞれの体色に似ている。性質は、ツキノワグマよりは荒いが、人間を見れば避けるのがふつうだ。しかし、北海道の開発の進展にともなって、ヒグマが人を襲う話があとを絶

――――→＊



ヒグマの年別捕獲数

年度	捕獲数
1955	368
1956	649
1957	517
1958	298
1959	440
1960	427
1961	380
1962	868
1963	381
1964	794
1965	511
1966	519
1967	479
1968	494
1969	523
1970	589
計	8237
年平均	514

1970年度に捕獲されたヒグマ589頭の分布図　（原案　犬飼哲夫）

――カラーページ注

〔注1〕 **オオパンダの分類**　オオパンダはアライグマ科にはいってはいるが、同じ科の他の種が、すべて長い尾をもっているのに対して、その尾はきわめて短い。おまけに、歩き方は蹠行（しょこう）性で、体形全体、すなわち骨格の総体もクマそっくりである。だから、シロクログマとかイロワケグマの別名のとおり、クマ科の一種とするのが当を得ているように思われる。

また、中国の学者のように、オオパンダ科という別の科を設けている立場もある。しかし、比較解剖学的研究からは、少なくともクマとは別にされ、アライグマ科に分類するのがふつうである。

すなわち頭骨上から見ると、頬弓（きょうきゅう）が最前位の門歯のそばから出ていること（クマではもっと後位置から出る）。さらに、下あごの前臼歯が長いこと。これらが、アライグマ科と共通の形質なのである。クマとの外形の相似については、これが、平行進化の結果、適応してクマに似たものと見るわけである（北アメリカのアライグマと、日本にもいるイヌ科のタヌキとの関係がこの例である）。化石上は、アライグマ科の祖先型動物がユーラシア大陸に広く分化して存在したことが確かめられ、オオパンダはショウパンダとともに、その遺留型として大陸の高山地帯に残存しているのであろう。

〔注2〕 **アルマン・ダビッド神父**
Armand David（1826―1900）かれは中国での伝道（1862―1874）のかたわら、パリの自然史博物館のために奥地へ3度も旅行して、数多くの動植物をヨーロッパへ紹介している。そのなかには鳥類が58種、昆虫類は100種、そのほか、いくつかの哺乳類がふくまれている。なかでも有名なのが、オオパンダと、偶蹄（ぐうてい）目シカ科のシフゾウである。

オオパンダについては、毛皮を見た10日後に、毛皮とともに短いコメントをパリの博物雑誌に寄せ、学名を *Ursus melanoleucus* と命名した。しかしその後、アルフォンス・メルナドワルス（1835―1900）が、この動物の標本を詳細に検討してオオパンダがクマ科ではなく、アライグマやショウパンダに近縁の種であることを発表し、学名を現在のような *Ailuropoda melanoleuca* とした。

ダビッドは、かれ自身が動物学への最大の貢献だという、オオパンダの名誉ある命名者になったうえ、その名はもうひとつの大きな発見、シフゾウ *Elaphurus davidianus* の学名のなかにとどめられている。

〔注3〕 **オオパンダの捕獲**　ダビッド神父の紹介以後は、スーチョワン（四川）省やビルマでオオパンダの化石が発見されたり、1916年に、ドイツのシュトッツナー探検隊のフーゴー・バイゴルドによって若いパンダが捕えられたが、すぐに死んでしまったという程度で、いずれも、毛皮や骨などを入手したにとどまった。

しかし、1929年4月、アメリカのカリー・ルーズベルト探検隊を皮切りとして、続々とハンターが組織され、生きたパンダを求めてスーチョワン、ユンナン（雲南）、シンチヤン（新疆）へと分け入っていった。その最初のオオパンダは1936年11月、アメリカの婦人、ルース・ハークネスによって捕えられ、シカゴのブルックフィールド動物園に移された。

このようにして、多くの人たちの努力によって捕えられたオオパンダは、各国の動物園に送られ、そこで飼育された。左下は、その一覧表である。

オオパンダ飼育一覧表（1971年9月1日現在）

愛称	性別	到着年月日	最終動物園	死亡年月日	推定年齢	入園関係者
スーリン	雄	1937・2・8	シカゴ	1938・4・1	1歳6カ月	R. ハークネス
メイメイ	雄	1938・2・18	シカゴ	1942・8・3	5歳3カ月	〃
パンドラ	雌	1938・6・10	ニューヨーク	1941・5・13	3歳6カ月	R. C. スプナー
ミン	雌	1938・12・24	ロンドン	1944・12・26	6歳10カ月	F. T. スミス
スン	雄	1938・12・24	ロンドン	1939・12・18	2歳6カ月	〃
タン	雄	1938・12・24	ロンドン	1940・4・23	3歳1カ月	〃
グランマ	雌	1938・12・24	ロンドン	1940・1・9	2歳8カ月	〃
パン	雄	1939・5・1	ニューヨーク	1940・5・5	1歳11カ月	D. ウェイハン
ハッピイ	雄	1939・6・24	セントルイス	1946・3・10	8歳9カ月	F. T. スミス
パオペイ	雌	1939・9・12	セントルイス	1952・6・24	13歳8カ月	G. キャンベル
メイラン	雄	1939・11・16	シカゴ	1953・9・5	14歳8カ月	A. T. スティール
パンディ	雌	1941・12・30	ニューヨーク	1945・10・4	4歳8カ月	J. ティーバン
パンダ	雌	1941・12・30	ニューヨーク	1951・10・31	10歳8カ月	〃
リエンホー	雄	1946・5・11	ロンドン	1950・2・22	4歳5カ月	マ・ティエ
ピンピン	雄	1957・5・18	モスクワ	1961・5・29	6歳	I. ソスノフスキー
チーチー	雌	1958・9・5	ロンドン	生存中	14歳4カ月	H. デンマー
アンアン	雄	1959・8・18	モスクワ	生存中	14歳	I. ソスノフスキー

表は、これまでに、世界各国の動物園で飼われたオオパンダの一覧表である（中国、北朝鮮をのぞく）

〔注4〕 **アライグマの水洗い行動**　飼育されているアライグマは、その名の由来どおり、食物を水で洗うかのような動作をする。水中に食物をつけ、よく発達した指を動かしはするのだが、ほんとうに洗うわけではない。ビスケットをつけて溶かしてしまったこともあるが。

一方、自然状態（野生）のアライグマは、水中からいろいろな動物を捕えて食べるが、水から離れた場所では食物を洗うどころか、水につけることもない。この動物は洗わないのがふつうなのだ。

この行動の違いをどう理解するか？

ロンドン動物園の実験によると、飼われているアライグマでも、水がなければ洗わずに平気で食べた。よごれた食物でも平気であったし、食物による行動の差はなかった。水がそばにあれば、なかにつけて食べていたが、注意して見るとそれは水の底から食物を捜して食べる動作に似ていた。自然状態では、日常に行なっているこの動作が、動物園という状況下では、行ないえないわけである。そこで、そばに水がおかれれば、水が解発刺激となって一応入手した食物を、わざわざ水中にもどして、あたかもそこで捜し当てたようにしてつかんで食べるという、異常行動であらわれる。それが、洗うように見えたのだ。■　（小原秀雄）

ヒグマと2人のイノシシ 25

傷だらけの栄光

畑　正憲


眠りからさめても、人間の子どものようにむずかることはない。ひとりできげんよく遊ぶ

叱責の効果が、これほど早く現われるとは思ってもみなかった。気迫をこめてどなりつけた翌朝、僕の髪の毛を引っ張って起こしたどんべえは、まるで別人の感があった。

手を咬むには咬んだが、10年飼ったイヌの如く、やわらかく口の中へ入れるだけである。ジャンパーの上から咬んだ際も、衣服だけか、肉が含まれているのか、口ざわりで区別してくれた。それでも、たまにきつく肉を咬むと、

――失敗った

といった風に、慌てて口を離した。

心配していたいじけた感じは、みじんも見当たらなかった。相変わらずはね回るし、僕を相手にじゃれたがった。

「たいしたものだ。クマってえ奴は、想像以上にタフだ」

人の子を育てた経験がない弟は、目を丸くした。「クマがタフだというより、幼い生きものがタフなのじゃないかな」

と言うと……」

つまり、叱られたことなんか根に持ったりしないことさ。叱られ叱られ学習してゆかねばならない幼児が、それでねじ曲がるようだと、この世はひねくれもの揃いになっちまう」

「なるほど」

「ひと眠りしたら忘れて、また親にすがっていく。それが自然の姿じゃなかろうか。叱られた子供が、ハンガーストライキをやったなんて聞かないものな」

「そうだな。どんべえがタフであるのは、どんべえの気質とからだかもしれないな。昨夜見ていて、叱るのも大切だ、と僕も思い始めた。ところがクマはタフだから中途半端な叱り方では、遊びだと思うのかもしれない。ここ一発という時には、全身で、思いっきり怒りをぶっつけた方がいいようだね」

「賛成だ。ただし、家の中にタブーが多過ぎるのはかわいそうだ。あれをやっても駄目、これをやっても駄目では、それこそいじけてしまう。タブーをできるだけ少なくして、怒る際には真剣に怒ってやる必要がありそうだ」

どんべえのために、島に建てた家は惨たんたるありさまだった。あらゆる戸には鍵がかけられ、台所はフスマをはずして封鎖されるし、妻と娘は押入れの上段で寝る始末だった。

その翌日、僕は丸裸になって、どんべえを前から抱いてみた。するとどうだろう、彼女は僕の皮膚を舐め、口で咬んでみたが決して傷はつけなかった。やっと人の肌のもろさを憶えてくれたのである。

僕が家族に向かって、「どうだ、偉いだろう、どんべえは」

と威張ると妻が一言

「傷だらけの栄光ね」

妻にも青い傷跡がある。それにもまして、僕の片腕である弟のものはひどい。皆よく、頑張ってくれた。これで戦争は一段落である。後は、更に気の長いゆったりした変化が待っている。ともかくも嵐の日々は去ったと思ってよかろう。

どんべえが手もとにくるまでは、育てる方法について、僕はあれこれと案をめぐらした。しかし現在、やっと、僕なりに裸になってつきあうのが本道だと思い当たっている。

僕の中の感情の波立ちを、素直に、何らかの方法で相手にぶつける以外手はないようだ。綺麗ごとでは済まされぬ、とはそういうことだった。飼育ケージや鎖で飼っていて、日に数時間を費やすのとはわけが違う。お互いにきげんがいい時だけ鼻を突き合わせているのでは、共同生活をしたことにはならぬ。生活とは、良きも悪しきも混ざり合って、針を回さねばならぬ長い時間だ。僕が仮に苛立ち易い人間なら、どんべえもそうなるだろう。それしか共存の道はないのである。

途中でボロを出す位なら、最初からむき出しにしてやろうではないか。それがせめてものどんべえへのプレゼントである。

動物が飼主に似ると言われているのは、顔や姿態ではなく、あくまでも性格をさしているのだろう。長く側にいるうちに、その性格を写し取られてしまうの

---

*

たない。これについては、クマの習性が変わったというよりは、ヒグマに潜在する、攻撃あるいは自己防衛の本能が、環境の変化に適応して出現したのだと見ることができる。

3000頭の生息数が変化しない理由

エゾヒグマの生息数は、約3000頭と推定される。クマは単独生活のため、その計算は困難だが、3000頭という数字は、数十年来変化がないものと思われる。この根拠には、捕獲数の統計表（別図）が示すように、510頭という捕獲数が変化していないことがあげられる。

3000頭のヒグマのうち、雌雄の数は生物界の原則と道内の観察からも、ほぼ半数ずつといえる。ヒグマの繁殖は、多少の例外があるにせよ、4歳から8歳の雌が出産可能。この数もほぼ雌全体の半分（750頭）であろうと思われるので、2年に1回、1産に1〜3頭、ふつう2頭生めば、1年に1頭という数になり、毎年750頭がふえている計算になる。

毎年、平均約510頭の捕獲のほかは、老衰による自然死と事故による死亡も数えられるから、エゾヒグマの生息数は、いつも同じ状態であるといえる。

ところで、なぜ、毎年ヒグマの被害が報じられ、また生息数もいっこうに変化がないのであろうか。ヒグマの捕獲は多少の増減こそあれ、800頭が1年の最大数で、それを越えたことがない。

この原因については、第1に、北海道という自然環境があげられる。100年来の開拓が進んだといっても、それは全道の30パーセントであって、残りは手をつけられていない山岳山林地帯である。エゾヒグマの隠れ家は、こうした場所の木の繁みや、草むらにつくられている。

しかも、温帯域であるため、雨もよく降り、植物が繁茂する。山には、クマが好むハイマツの実、野イチゴ、クロマメノキ、ヤマブドウ、ナナカマドも豊富である。エゾヒグマは、このように開拓の進んでいない、植物の豊かな地域にすんでいる。

北海道の冬は寒冷と積雪できびしく、春と夏は短い。これは野生動物にとっては、決して、快適な自然条件ではない。だから、かつては北海道の山野に跋扈していたシベリア系のエゾオオカミは約80年前に絶滅し（人間による乱獲も一因だが）、またエゾシカも保護政策がとられるまでは、冬の積雪による食糧の欠乏に窮して、何度か滅亡の危機にひんしている。

しかし、エゾヒグマは、このような自然条件に屈していない。自然条件に生態的に適応しているため、3000頭もの生存数を維持して、変わることがない。

冬眠――これが第2の原因なのである。ヒグマの冬眠は、冷血動物のヘビ、カエルとは異なって、体温も下がらず、仮死状態になるのではない。むしろ、冬ごもりといったほうが適切である。

冬ごもりで自然を生きぬく

冬ごもりは、11月の半ばから、翌年3月の中、下旬の4か月間つづく。この期間は絶食の状態で、うつらうつらである。

ヒグマは4か月間の冬ごもりのため、体重は4分の3に減ってしまう。だからもしも冬ごもりの前にじゅうぶんな脂肪をたくわえておかなければ餓死してしまう。人工的に冬ごもりをさせた実験では、あまり体力をつけさせずに穴へ入れたクマは、3月はじめに餓死していた。


野生のヒグマ（大雪山国立公園）撮影 筆者

クマの冬ごもりの準備は、種の維持のため、自然に身についたものである。夏の中ごろから、食欲が盛んになり、脂肪はしだいに蓄積して、晩秋になると体重は最大になり、見るからに太っていて大きい。4歳以上の成獣の場合、晩秋の皮下脂肪は臀部（でんぶ）でもっとも厚く、15センチにも達している。このほか、腹腔の腸間膜にも脂肪が厚くついて腸が細く見えるほどである。

このように、クマは体内に脂肪のエネルギーを蓄積するほか、冬ごもりの間に

である。

どんべえを見ながら，僕は最初人間の原型を見ているつもりだったが，しだいに，生まれてこのかた変わっていない，自分の根もとをみつめているのに気づかざるを得なかった。

どんべえの日課は，目がさめて甘える，食事をする，あばれる，大小をする，むずがって眠る——その繰り返しである。1日に5度も6度も眠る。

その分割された睡眠の大切さもわかってきた。どんべえにとって，1回の眠りは1日に相当しているのである。

むずがる時期にはいたずらをすることが多いから，きつく叱られてしまう。と，ふてくされて眠る。そして1時間後，にこやかにお目ざめになるのだ。



まる裸で抱いても，もう傷つけられる心配はなかった

僕はこの眠りが不思議でならない。仮死状態になり，脳の働きはストップしているようで，内部で目に見えぬドラマが進行しているように思えてならぬ。

受験勉強をしている際もそうだった。数学の問題が解けずに，疲れて眠ってしまう。すると，目ざめた時に，何の苦もなく解けることがある。

どんべえもそうだった。ひと眠りごとに何か違うことを身につけて起きてくるように思えて，起きぬけの千鳥足で近寄ってくると，前から抱いて脣を舐めさせた。

つい何日か前までは，それは死の接吻であった。気が立つと脣を咬まれるので，気が気でなかった。けれども，やっと平和な挨拶になった。

そのうち，弟が妙なくせをつけた。背中を向けると，どんべえが乗ってくるようになったのである。

お馬どうどう

ハイどうどう

どんべえは人の背中に乗って，部屋をぐるぐる回って貰うのが好きになった。さぼって1個所でゆすっていると，早く回れとばかりに髪の毛を引っ張る。

弟だけなら構わぬが，当然人に見境がつかず，僕にもしきりに要求した。

出発進行！

はい，進みまあす

四つん這いになって，のっしのっしと歩いていると，童心に返る。娘が小さい時も，よくこうして背に乗せて歩いたものだった。髪の毛を両手でつかんで，喚



畑さんの背中にまたがりおウマのけいこ　“ハイシどうどうハイどうどう”

声をあげ，親になったよろこびをかきたててくれた。

どんべえは声を出したりしない。腹をぴったり僕の背に密着させ，顎を肩に乗っけて，身をまかせきっている。その顔つきったらない。気持が良さそうで，うっとりしている。おんぶにだっこ，がもっと気楽に出来るようになったら一人前である。娘がすもうを取れるようになったら，と楽しみにしているのだが，まだ人を警戒する野性が残っていて，驚くほど見事に人間を見わけてしまう。

男性なら，見知らぬ人でもたちまち許すが，女性をナメている。これは，妻の責任でもあるが，怒る際に，

「痛いよ，どんべえちゃん」などと言って，軽く押しのける位なので，もう一つピリリとしまらないのである。ヒグマは，ウーマンリブの親玉ででもなければ，女性だけでは家族化出来ないのじゃないかと思ったりしている。

どういうわけか，どんべえはカメラのシャッター音に敏感であった。そのため僕とからんでいる際神経をたててはと，撮影を控えた。けれども，もう大丈夫だろう。■

体力の消耗を少なくするためのくふうもしている。冬ごもりの穴は，地熱のある土中に掘られ，入り口には雪が深く積もるような場所を選んで，雪を防寒と入り口の隠蔽の道具に活用する。穴の床には，ササの葉や干し草を30センチもの厚さに敷いて，一種のベッドにしている。

冬ごもりの穴にはいる時期には，すでに食物をとらないので，穴の中にはふんが見当たらず，干し草のかおりが満ちて，はいってみると楽土の感すらあるくらいだ。

穴の入り口は直径40～50センチで，人間がはってはいれる程度である。1，2メートルのトンネルがあって，その奥がたたみ1畳ほどの広さに高さは150センチほどの寝室になっている。

秋まで食べ歩く

ヒグマは，春先に穴を出ると，決して同じ穴にはもどらない。その後は行く先先でごろ寝をし，吹雪の激しいときであっても，雪のなかに穴を掘って隠れる程度である。草木の茂みのなかに，簡単なへこみをつくって寝ているのである。

若いクマは別として，大部分のクマは夜行性で，昼に出歩くことはない。体力が消耗しているから，行動は逃避的で山の奥へと食物を求めてはいっていく。

まず，雪解けのあとに萌えいづる，フキのトウ，ミズバショウ，スゲ類の若芽などを求めて移動する。やがて各種の草木が芽を出し，食物が豊富になる。クマザサの筍やフキの茎や葉，ヤマウド，カンゾウ，キスゲなどを食べ，またミヤマニンジン，ボウフウのようなかおりの高い根茎を掘りだす。

渓流に下っては，ザリガニをあさる。ジバチやアリの巣を見つけると掘りおこし，成虫，さなぎ，幼虫，卵までも食べている。この時期は，消化が徹底しているため，ふんを見ても食べたものの判別ができないほどである。

北海道の秋は早い。8月下旬には高山植物が紅葉し，各種の草木は実を結んでくる。クマは，ハイマツの熟した実や，まっかになったナナカマドを盛んに食べる。森林地帯では，ヤマブドウやコリアが熟し，峰から移動してくるクマは，こうした場所をのがさない。とくにナラやカシワのドングリのある所には必ず現われるほどだ。この時期のクマは，実に貪欲で，目の前に食物があるかぎり，食べつづけている。このためか，ふんのなかには，ドングリやヤマブドウが未消化のまま残っている。

冬ごもりの準備は真剣である。大いに食べてエネルギーをたくわえなければならないから，山の一定地域を自分のなわ張りにして，どのクマもはいることを許さない。

だから，ときにはクマどうし，命がけで戦って，勝ったほうが一方を食べてしまうこともある。また，冬ごもりの時期が近づいても，病気やけがなどで太りきれず，食物を求めて捜しまわっているクマがいる。これを北海道では「穴持たず」といって恐れる。野山が雪におおわれると，食べ物がいよいよなく，やむなく人家の付近に現われ，家畜や人間などを襲うからである。

エゾヒグマの寿命は10年

子ども連れの母グマがいる。このクマは，いつも子どもにつきっきりで，生活のやり方を教えるとともに，他のクマからもわが子を守っている。母子は秋にじゅうぶんに太ると，いっしょに冬ごもりの穴にはいり，翌年の春，別れる。母グマは，その夏，再び妊娠する。

ヒグマの出産は，冬ごもり中の穴の中で行なわれる。1月下旬から2月上旬のことである。もちろん絶食中で，授乳も引きつづいて行なうから，驚くべき体力である。生まれたばかりの子どもは，体長22センチ，体重350グラム程度で，全身をビロード状の細い毛がおおって，目は閉じたままである。

生まれたときは大きなドブネズミほどの赤ん坊でも，発育はきわめて早く，2か月後に穴から出るころには，小型のイヌほどの大きさになっている。動きは活発で，すぐ，木にも登れるようになる。

エゾヒグマの生態寿命は，10歳が限度のようだ。頭骨を数百集めても，10歳を越えるクマはきわめて少なかった。

筆者の飼育観察によれば，4～7歳までがもっとも活動的で，10歳を越えるクマはさすがに動きは鈍い。おそらく山野にもどれば，激しいなわ張り争いに勝てず死んでいくのであろう。ただし，飼育下では20歳を越えるものもあるが，きびしい競争のないところでは，当然といえるかもしれない。■

読者のアルバム 2



ふたごザルの誕生

写真と文
山中正行

餌（え）づけされたサルの大集団で有名な，大分市の高崎山自然動物園で，6月23日の朝，ふたごのサルが生まれた。

ふたごザルは，人間なら九つ子に相当するほど珍しいとされているが，全国的にみて，誕生の例はあっても育った実例はほとんどないらしい。雄と雌のふたごザルで，ことし高崎山で生まれた赤ちゃんザルの99番めと100番めに当たる。

たいへん珍しいニュースということで，全国各地からいろいろな問い合わせがあるが，若い母親ザルは，きょうも黙黙と子ザルたちを育てている。しかし，さすがに母親ザルも疲れるのであろうか，山から寄せ場におりてくると，ふつうはそれほど飲まない水を，30分ぐらいの間に3回も長々と飲んでいた。

いずれにせよ，このかわいいふたごザル，大きくりっぱなサルに成長してほしいものだ。■（別府市・38歳・音楽家）

◁原稿募集▷

読者の研究――動物の採集，分布，飼育観察などの研究報告

仲間のひろば――本誌への要望，動物界への意見，主張。または自然保護に関する各地の現況，対策など。

動物ニュース――学界，同好会，動物施設，飼育など，動物に関する珍しいニュース。

ペット相談室――ペットの飼育法，病気の治療，購入などに関する質問。

動物写真――あなたが撮影したもの，または秘蔵の動物写真。

☆採用の分には，薄謝または記念品を進呈いたします。

送り先は
東京都千代田区有楽町2の3（〒100）
朝日新聞社「世界動物百科」編集部
『私たちの仲間』係

ペット相談室



担当
前川　博司
（動物愛護協会附属動物病院院長）

〈問〉　ネコはやみ夜でも目が見えますか。瞳（ひとみ）が細くなったり開いたり激しく変化するのはなぜですか。

（札幌市・本多徳二・中学生・14歳）

〈答〉　ネコの瞳は縦に細長く縮まりますが，開くと大きくまるくなります。これはむかしから注目されていたらしく，古代エジプトではネコの目は太陽の回転に従って変化し，夜間よく見ることのできるのは，太陽がネコの目を通して下界を見るためである，と信じられていたといいます。

なぜ縦に縮むかは，はっきりしませんが，草のあいだから獲物をねらうのによく見えるように，自然に縦に細くなってしまったのだという適応説が一般に認められています。ネコの目を動かす筋肉は，あまりよく発達していません。また，水晶体というレンズは大きく，その焦点を合わせる能力は悪く，あまり遠目はきかないのですが，そのかわりに光を感ずる視神経は非常に鋭敏で，光に対して瞳は敏感に動き，精密な感度でその絞りを調節します。

大きなレンズと広く開く瞳は，わずかな光でもよく集めて網膜にあてます。網膜は目の奥底にある薄い膜で，視神経が密在し，光を感じるのです。さらに，その網膜の裏側の奥には，光を反射する膜があって，1度網膜を通りぬけた光を反射して，後ろ側から再び網膜にあてるしくみになっています。目にはいった光は，2度視神経を刺激するわけです。夜，ネコの目が光るのは，目の底で反射した光が見えるからです。

しかし，ネコの目の視神経は，光の強弱にだけしか反応しません。光が強くなるか，弱くなるかの2種類の刺激にしか感じないのです。

他の動物のように，動きとか形とかにはまったく感じません。この不利な視神経の働きを補うために，光の強弱に対してはきわめて鋭敏で，それに対応して瞳はつねに動いて，強い光から網膜を保護しているわけです。

形や動きがわからない目では，よくものが見えるとはいえないでしょう。ところが，この光の強弱の刺激を，ネコの脳は実にすばらしい能力で分類します。視神経から送られた光の刺激の大部分が脳の1か所に集められ，そこから大脳の皮質というところに送られると，数百種に分類され，それぞれ異なった角度から受けとり，処理し，光の刺激がなんであるかを判断するのです。

明暗はもちろん，形や，動きや，遠近などを確実に知覚します。目の不利な神経の働きを，その特徴を巧みに使って脳で判断し，たいへんよくものを見ることができるのです。といっても，まっ暗やみでは，光がまったくないのですから，さすがのネコも何も見ることはできません。

ネコの目のように変わるといいますが，ネコの瞳の激しい動きは，このような目の第一線での重要な働きのあらわれなのです。またネコは，色彩を判別することはできないようです。人のように色を感ずるのは，網膜にある錐状（すいじょう）体という細胞ですが，それがネコにはほとんどありません。ネコはただ黒白写真のように，ものを見ているわけです。■

裏表紙説明

ヒトコブラクダ　サハラ砂漠（さばく）で休息するツアレグ族の人びとと，ヒトコブラクダ *Camelus dromedarius*。巨獣に見えるのは写真のとり方によるもので，実際には体長3メートル，体高2メートルほどである。

ラクダに乗っての旅行は，童謡「月の砂漠」のイメージほどロマンチックなものではない。ラクダは側対歩（そくたいほ）といって，同じ側の二肢を同時に上げ，一歩ごとに体重を他の側に移すから揺れが激しく，乗りごこちはひどく悪い。乗り手が〝乗り物酔い〟にかかるから〝砂漠の船〟と呼ぶのかもしれない。

一見，ロバにまさるとも劣らぬ実直そうな顔つきだが，その実，おこると人間にツバを吐きかけたり，かみついたりする。旅行者は，ラクダをだましだまし砂漠を越えるのである。■

Ph. Françoise Huguier

愛育の記 募集

動物の飼育，観察をはじめ，人と動物のあたたかい交流を描いた記録，作文などをお寄せください。

原稿の形式は自由ですが，400字詰原稿用紙30枚程度にまとめてください。

〈お問合せと送り先〉
東京都千代田区有楽町2の3（〒100）
朝日新聞社「世界動物百科」愛育の記係
電話・東京03（212）0131

●募集対象

① 個人の部（共同研究などを含む）
　A小学生の部　B中学生の部
　C一般の部

② 学校の部
　A小学校の部　B中学校の部

●締切り・応募方法

昭和46年12月31日必着。第1ページに，住所，氏名（学校の部は学校名と指導教諭名）を明記のこと。

●賞

個人の部

AB	最優秀作各1篇	奨学金（各10万円）
	優秀作各5篇	奨学金（各2万円）
C	最優秀作1篇	10万円
	優秀作5篇	各2万円

学校の部

AB	最優秀各1校	理科用品（各20万円相当）
	優秀各5校	理科用品（各5万円相当）

▶おことわり　本号，『もうひとつの世界』『漢字のふるさと』は休載します。



絹本着色
1907年
144.2×82.7センチ
京都市立美術大学蔵

熊　　村上華岳

堂々たる熊の姿を，日本画の技法で見事に捉えたこの作品は，京都の美術工芸学校で学んでいた華岳の卒業制作の作品である。

華岳は，大阪の天満で生まれ，神戸で育ち，京都に学んだという経歴の持主で，いわば上方の持つさまざまな面を，幼い頃から全身で受けとめて育った画家である。もともと人並み優れて鋭敏な感覚に恵まれていたが，それに加えて，大阪人の現実的感覚と，京都の洗練された華やかさとを，ともに兼ね備えることができたのである。

この「熊」の絵が描かれたのは，満で数えて華岳がわずか18歳の時のことであるが，そこにはすでに，師の竹内栖鳳から受け継いだ京都派の綿密な写実力が，遺憾なくあらわれている。その上，華岳は，少年の頃から犬や猫などの動物が大好きであったそうだから，動物の姿態を観察してそれを表現することは，お得意のところであったろう。

どこかとぼけたような感じすらある，熊のゆったりした表情や，思わず手を差し出して撫でたくなるようなそのふさふさした暖かい毛皮の感触など，驚くほど真に迫って描かれている。それでいて，画面全体は，構図として破綻のないまとまりを示し，豊かな装飾的効果をも失っていない。大正期から昭和の前半にかけて，特異な作風で新しい日本画の可能性をきり開いた華岳の出発にふさわしい，優れた傑作と言うべきであろう。■　（高階秀爾）

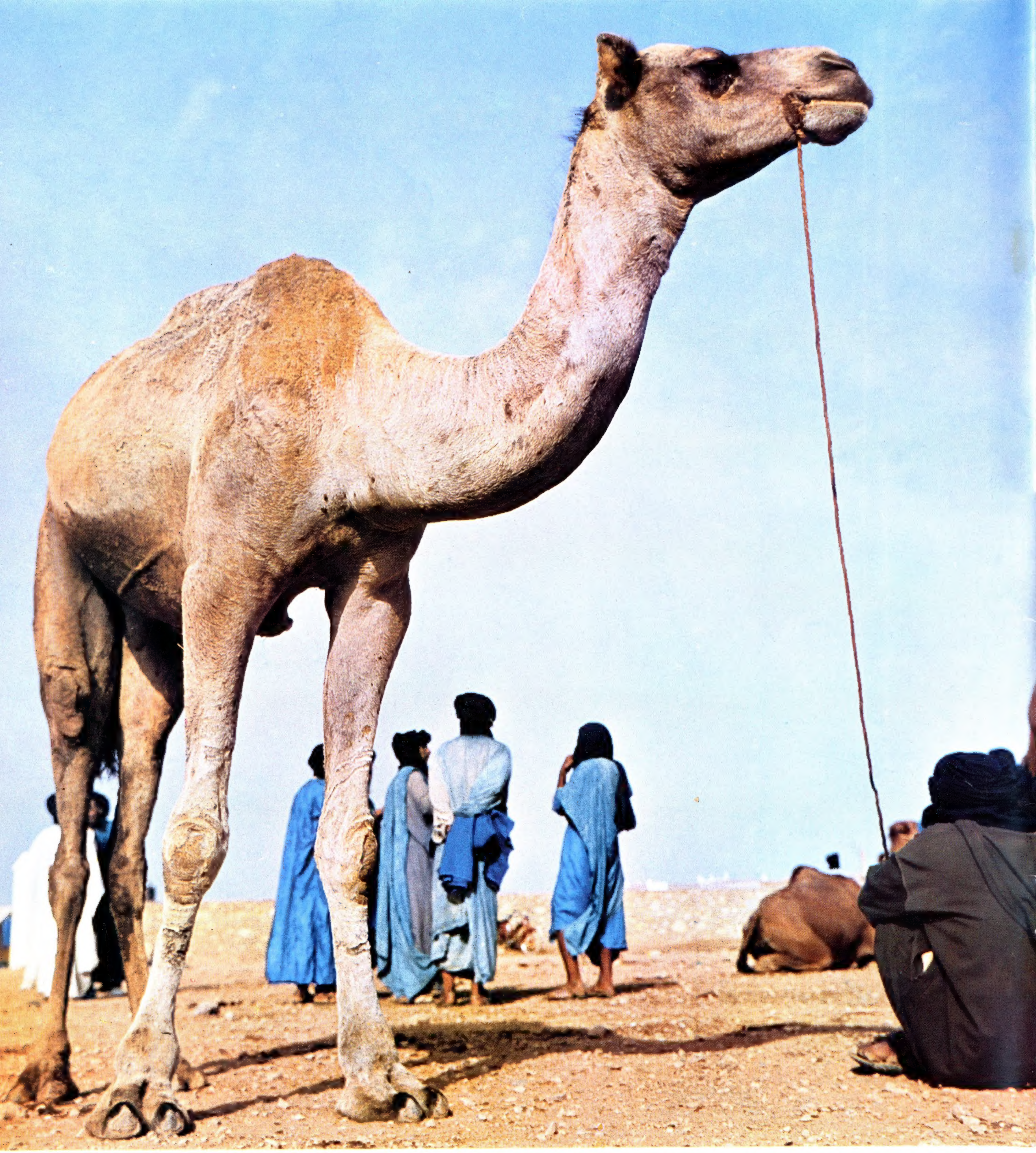
第1号～第64号（概説・哺乳類）のおもな内容

◉数字は号数，白ぬき数字は既刊

1 概説Ⅰ　生態学，自然保護
2 概説Ⅱ　動物分類学，生物学的環境
3 霊長目　ゴリラ
4 霊長目　チンパンジー，オランウータン
5 霊長目　テナガザル，オナガザル
6 霊長目　カニクイザル，ヒヒ
7 霊長目　キヌザル，オマキザル
8 霊長目　メガネザル，キツネザル，アイアイ
9 食虫目　ツパイ，モグラ，ハリネズミ
10 翼手目，皮翼目　コウモリ，ヒヨケザル
11 齧歯目　ヤマアラシ，チンチラ，ミズブタ
12 齧歯目　トビネズミ，ヤマネ
13 齧歯目　家ネズミ，野ネズミ
14 齧歯目　レミング，ビーバー，ハムスター
15 齧歯目　リス，ムササビ
16 齧歯目　ウサギ
17 食肉目　チーター，ライオン
18 食肉目　トラ
19 食肉目　ヒョウ，ジャガー
20 食肉目　ピューマ，ヤマネコ
21 食肉目　イエネコ
22 食肉目　ハイエナ，マングース
23 食肉目　ジェネット，カワウソ
24 食肉目　スカンク，アナグマ
25 食肉目　テン，クロテン
26 食肉目　ミンク，イタチ
27 食肉目　パンダ，アライグマ
28 食肉目　マレーグマ，ホッキョクグマ
29 食肉目　ヒグマ，ツキノワグマ
30 食肉目（家犬）　犬概説，盲導犬，警察犬ほか
31 食肉目（猟犬）　グレーハウンド，セッター
32 食肉目（番犬）　日本犬，セントバーナード
33 食肉目（ペット犬）　スピッツ，チワワ
34 食肉目（野生犬）　ディンゴ，リカオン
35 食肉目　キツネ，ホッキョクギツネ
36 食肉目　オオカミ，コヨテ
37 食肉目　アザラシ
38 食肉目　セイウチ，オットセイ，トド
39 奇蹄目　サイ，バク
40 奇蹄目　ウマ概説
41 奇蹄目　サラブレット，ポニー
42 奇蹄目　ロバ，ラバ，シマウマ
43 岩狸目，長鼻目　イワダヌキ，ゾウ
44 偶蹄目　カバ，ペッカリー
45 偶蹄目　イノシシ，ブタ
46 偶蹄目　ヒツジ，ビッグホーン
47 偶蹄目　ヤギ
48 偶蹄目　ヤギ（飼育種）
49 偶蹄目　レイヨウ
50 偶蹄目　ブラックバック，クロレイヨウ
51 偶蹄目　ダイカー
52 偶蹄目　アフリカスイギュウ
53 偶蹄目　ウシ，コブウシ
54 偶蹄目　クードウ，プロングホーン
55 偶蹄目　キリン，オカピ
56 偶蹄目　トナカイ
57 偶蹄目　シカ
58 偶蹄目　ラクダ，ラマ
59 貧歯目，有鱗目，管歯目　アリクイほか
60 海牛目，鯨目　ジュゴン，ナガスクジラ
61 鯨　目　イルカ，マッコウクジラ
62 有袋目　カンガルー，コアラ
63 有袋目　バンディクート，フクロネコ
64 単孔目　カモノハシ，ハリモグラ

以下65～128　鳥類　129～144　両生類，爬虫類
145～160　魚類　161～192　昆虫類，甲殻類

世界動物百科　通巻27号　昭和46年9月12日発行（毎日曜日発行）　編集・発行人　大田信男　発行所　朝日新聞社　東京 大阪 北九州 名古屋　印刷・凸版印刷　定価220円



ヒトコブラクダ　　説明 30ページ

雑誌コード　0632